



冷酷王の

知られざる秘密

(4)

O₂

あれから数日後、俺は頬を染めてスノーの話を延々とするアーノルドに部屋を占領されていた。ダリアはスノーに呼び出されて居ないので、アーノルドの暴走を止める者が居ない。

「もう本当にどうしようかってぐらい可愛いんだ。僕はずっと今まで自分の好みの女性はスノーとは真反対だと思ってたんだけど、それは多分都合が良かっただけなんだよね。こんなにも丁寧に段階を踏むのは正直初めてで戸惑っているよ」

「そうか」

「あの小さな身体で僕を受け入れようと必死になる仕草とか、恥ずかしくて顔を真っ赤にしながらもこちらを伺ってくる様子とかを見るだけでも僕は……」

「なあ、アル。お前、仕事をしに来てるんだよね？」

「もちろんだよ。そのついでに話をしてるだけだよ？」

「そうか？ さつきからスノーの話しか聞いていないんだが」

「そうかな？ ただ……」

そこまで言っただけで顔が綻ばせていたアーノルドの顔が曇った。

「なんだ」

「……いや、これはもうどうしようも無い事なただけだし、スノーは初めてだったんだよ。」

それもあつてその……ね？」

言葉を濁したアーノルドに俺は無言で頷いた。要は入り切らなかつたのだろう。

けれどそれは仕方ない。長さだけで言えばアーノルドの物は俺のよりも長いとダリアはいつだったか言っていた。

「まあ、スノーは全体的に小さいしな。仕方ないんじゃないか」

「……そりゃ君の相手はサキュバスだろうから？ 君のでも簡単に飲み込むんだろうけど、スノーはあの通り見た目も中身も天使のようだから、終わった後も凄く僕を氣遣つてくれる……それが返つて申し訳なくなつてしまったんだよ。いっそ完全に勃たなければ良いのかな」

「それは止めておけ。絶対だ」

そのせいで三年間も勃たなくなつた俺だ。絶対に止めておいた方が良い。

「やけに熱心に止めるね」

「まあな。それで、どうなんだ？ 進捗は」

「そうだね。城に潜んでいたのはあらかた片付いたと思うよ。意外だったのはもう1人側室係の中に怪しい者が居た事だ。やはりあの女は毒殺だったのかもしれない」

「そうか」

淡々と答える俺を見てアーノルドはため息を落とす。

「君は本当に少しも驚かないね。少しは何かに動揺する事はないのかな」

「ダリアのする事にはしよっちゅう動揺しているが」

あのサキュバスのしでかす事にはいつも驚かされている。そもそも高位貴族の教育を受けていないからだろうが、ダリアを見ていると庶民の暮らしぶりには目を見張るばかりだ。その分余計に早くこの戦争を収めて退陣しなければならぬと思っている。

俺ではこの国の治安を守ることは出来ても、豊かにする事は出来ない。

しばらくこんな日が続いていた。日中はアーノルド、もしくはセルクがやってきてここで仕事をし、ついでだとばかりに互いの想い人の事を惚気て帰っていく。

セルクは今までもそうだったから違和感はないが、アーノルドに関しては違和感しかない。

そんなある日の事。

「オズ！ 君はサキュバスちゃんから何か聞いてないの!？」

いつものように部屋にやって来るなりアーノルドは珍しく乱暴に書類を俺の机の上に叩きつけた。

「何かとは何だ」

「そりゃ、あの子の事だつて言つたらあつち方面の話しかないよね!？」

それだけ言つてアーノルドはソファに横たわるように座ると、俺の為にダリアが入れて
いったトマトのジュースを一気に飲み干した。

「一体何があつた」

「昨日の事だよ。僕達はいつものように寝る前に少しだけ話をしてサキュバスちゃんに教
えてもらった新作の酒を飲んで新しい大陸について語つてたんだ。そうしたら珍しくスノ
ーの方からその、僕の隣に腰掛けてきて誘つてくれたんだけど、それだけでも驚いたのに、
事もあるうか自分でナイトドレスのボタンを外し始めて！」

「良かったじゃないか」

「問題はここからだよ。僕だつて男だ。目の前でそんな事をされたらあつという間に臨戦
態勢に入つてしまつてね、その、少々乱暴に彼女を押し倒してしまつたんだよ」

「嫌われたか」

愕然とした顔をしながら話すのでつきり嫌われたのかと思つたら、アーノルドは半眼
でこちらを睨みつけてくる。

「逆だ。喘ぎだしたんだよ。強く触つたのに！ 首筋にも歯を立てたかもしれない。胸に
だつて沢山所有印をつけてしまった！ それなのに、彼女は身を振つて喘いだんだ！」

「なあ、俺はその話をどんな顔をして聞けば良いんだ？」

一体そのどこが問題なのかさっぱり分からなくて問いかけると、アーノルドは眉を釣り上げてとうとうこちらへやってきた。

「少し前まで僕のを受け入れるのに四苦八苦していた彼女が！ 喘ぐとはしたなと思っていたのか必死になって声を殺していた彼女が！ この数日で入り切らない根本を擦り上げてくるなんて誰が思う!？」

「嫌だったのか？」

「とんでもない！ 最高だったよ！ おかげで一晩に五回もしてしまった。最後にはスノーさんも意識を失ってしまつてね……」

「疲れでか？」

「いや……絶頂して、だけど」

「だったら良かったじゃないか。共に気持ちよくなれたという事だ。で、その何が問題なんだ？」

いい加減鬱陶しくて思わず冷たく言い放つた俺を見てアーノルドは深い溜息を落としたり。そしておもむろに立ち上がって電話をすると、ダリアを呼びつけて実に宰相らしくダリアを問い詰め始める。そしてとうとう――。

「やっぱり君か！ おかしいと思ったんだ。突然スノーさんがその、あちらの方面で積極的になったから何事かと思っていたら！」

怒鳴るアーノルドを見てもダリアは少しも怯まない。それどころかシレットとした顔をした言うのだ。

「でも気持ち良かったでしょ？」

「うっ……そ、それはそうだけど！ どうしてまたそんな事になったの！」

「それはスノーに頼まれたからだよ。宰相様には凄く良くしてもらってるのに全部入らないの。満足させてあげるのはどうしたらいい？ ってね！」

隠すことも無くダリアが言うと、アーノルドはさらに頬を染めている。

「で、どうだった？ 最後まで入らなくても良かったでしょ？」

「……そうだね。何か色々触り心地も良くなってるし、達するようにもなってるって驚いたよ……本当に一体何をしたの？」

「触り心地が良くなったのはマッサージとオイルだよ。イクようになってたのは自慰の仕方をお教えたからね！」

「っ!? な、なんて事を教えるんだ、君は！」

「どうして？ いけなかった？ オズワルドにも言ったけど、セックスなんてどっちも気

持ちよくなつてこそだよ。スノーがイキやすくなつた事で中の具合も良くなつたはずだけ
ど？」

ダリアに言われた事が凶星だったのか、アーノルドは耳まで真つ赤にしてそつぽを向い
ている。こんなアーノルドを見るのは初めてかもしれない。

「ここはサロンなんだ。あまりスノーさんにそういうのを教えるのはどうかと思うんだ
ど」

なるほど。つまりアーノルドはスノーのセックス技術が向上する事を恐れているのか。
ようやく納得して書類仕事に戻ろうとすると、ダリアの笑いを含んだ悪魔のような声が聞
こえてくる。

「だったらあなたがセルクさんみたいにスノーを囲えばいいんじゃない？ でも言ってお
くけどスノーはあの通り美少女で気立てが良くて博識だから、地元に戻って家が再建した
ら絶対に引手数多だよ。賭けてもいい。そうなる前に何か手を打った方が良いと思うけ
どな」

「……何が言いたいのか？」

「べつにつに？ 早くオリガさんと本人に言っておかないと、スノーはあの通り頑張り屋
さんで勉強熱心だからこれからどんどんここで稼ごうとしちゃうかも？」

「っ！」

ニヤニヤしながらダリアが言うと、アーノルドは息を呑んで席を立ち、そのまま早足で部屋を出て行ってしまった。

そんなダリア達の会話を少し離れた所からずっと聞いていた俺は読んでいた本を閉じて呆れながら言う。

「お前はどこぞのやり手ババアか」

「惜しい！ やり手ビッチちゃんって呼ばれてたんだよ！ それにアーノルドさんとスノーがくつついたら、私はもう二度とアーノルドさんとは寝ないよ」

「そうなのか？」

「うん。相手が居る人とするのは私の趣味じゃないから。前世では仕事だから仕方無くそういう人たちとも寝てたけど、ここでは私も選べるからね！」

それを聞いて俺は深く頷いた。なるほど。ダリアは相手の居る男には手を出さないという習性があるらしい。それは朗報だ。

「そうか。ではお前のやり手ビッチちゃんの手腕をこれからもどんどん發揮してくれ。いつの間にかここはそういうサロンになっているしな」

「任せといて！」

ダリアはそう言って俺に近寄ってくると、本をどけて俺を覗き込んでくる。その顔は本当にあどけない。

「なんだ？ んっ」

「何かあんな話してたらしたくなってきたやつた」

ダリアはそう言って俺の唇を塞いで来たので、それが合図だったかのように俺は噛みつくようなキスをダリアに返す。

「仕方ない奴だな」

一旦火がつくと体力が切れるまで繋がりが続けるのが俺達の関係だ。ダリアは俺の膝の上に跨ると、俺のシャツのボタンを一つずつ外して首筋から胸、そして下腹部を指先でなぞりだす。

ゾクゾクとした感覚に思わず呻くと、そんな俺をダリアが嬉しそうに見下ろしてきた。

「ん、っふ……うっ」

ダリアの指先が肌の上を動く度に低く呻く俺を見て、ダリアは今度は肌に舌を這わせてきた。

俺は吐息を吐きながらももう我慢出来ないとはばかりにダリアのスカートの中に手を滑り込ませ、陰核を下着の上からそつと撫でた。

「んっ、あ……ふぁ」

ダリアのそこは既に濡れていた。指先で焦らすように何度も陰核を擦ると、後から後から愛液が溢れてくる。

「相変わらずだな、お前は。こっちはどうだ？」

言いながら俺はもう片方の手でダリアのドレスの前をはだけさせると、胸の先端に軽く口付けた。その瞬間、ダリアの腰が俺の上で跳ねる。

「あん！」

膣口を執拗になぞったせいで膣からは既に大量の愛液が流れ出していて、それに反応するかのようにダリアの乳首がピンとそそり勃つ。

その突起を楽しむように俺は摘んで捏ねくり回し、時折弾いて弄んでやると、ダリアはすぐさま反撃だとばかりに俺と同じ事を仕返してきた。

「なあ、脱いでも、良いか」

「痛いのか？」

「っ、あぁ」

先ほどから窮屈して仕方ない俺のペニスは、下着と下履きを必死になってお仕上げていく。

ダリアは俺の膝から下りるとベルトを外し、焦らすようにゆつくりと下履きを脱がせてきた。いつからこんな行為を受け入れるようになったのだろうか。

少しの抵抗もしないのはこの後に起こる事を俺はもうすっかり知っているからだ。

下着だけになった俺のペニスは下着の上からでも分かるほど窮屈そうにしていた。ダリアはそんな俺のペニスを下着の上からそっと撫でると、亀頭を指先でカリカリと刺激する。

「うっ、お、まえ……」

「気持ち良い？」

「っ、ああ」

亀頭が一番敏感な部分だ。俗に言う陰核の先端のようなものだ。そこを容赦なく責めてくるダリアに俺が呻いていると、おもむろにダリアが俺の目の前でドレスと下着を脱ぎ捨てると、続いて俺の下着も剥ぎ取った。

解放されたペニスは腹につくのではないかと思うほど腫れ上がり、既にビクビクと脈動している。

ダリアはそんな俺のペニスを嬉しそうに見つめ、亀頭に愛液を擦り付けるように跨るとゆつくりと腰を動かし始めた。

「はあ、オズの、熱い」

「お前もだろ」

吐息混じり呟くとダリアの体を無理やり引っ張り、腕の中に閉じ込めて小さな声で囁いた。

「このまま記憶が戻らなければ良い……」

いつまでもこうして俺を翻弄していてくれ。ダリアの肩口に顔を埋めて呟いた本心は、どうやらダリアには聞こえなかったようだ。

「ん、なに？」

キョトンとした顔をしたダリアを見て俺は微笑むと、ダリアの腰を掴む。

「いや……何でも無い。ほら、腰が止まってるぞ」

「あんっ！」

そう言っただけ思い切り下から突き上げてやると、ダリアの中は何かを期待するかのよう俺のペニスを締め付けた。

それでもダリアは必要以上に念入りに俺のペニスに何度も何度も愛液を擦り付け、突然、何の前触れもなく自分から俺のモノを膣に一気に啜えこんだではないか。

「うっ」

「あっ！」

一瞬の強い快感に思わず射精しそうになったが、どうにかそれw押し留めた俺はダリアを軽く睨みつけた。

「はあ、お前、予告は、しろよ」

「しない。私の、したいタイミングでしたい、もん！ つん」

ダリアは腰を動かしながら俺にキスをしてくるので、俺もそれを待っていたかのようにそのキスを受け入れた。

どちらともなく溢れる吐息に頭の中が赤く染まっていく感覚がする。

それでも俺達はキスを止めなかった。何となく離れがたかったのかもしれない。

こんな女、他にいない。もう手放せない。

いつの間にか俺の中でダリアの存在はこんなにも大きくなっていったのだと気づいて複雑な気持ちになる。

「はあ、つう、つく」

「ねえ、気持ち良い？」

「ああ……何回聞く、んだ」

「何回でも、聞きたい。こんなの、初めて」

ダリアはよくこうして何度も何度も行為の最中に尋ねてくる。傍若無人な女だが、俺へ

の忠誠心なども皆無だが、随分と献身的な女だとこんな時はいつも思う。

ダリアは俺の胸に舌を這わせながら腰を上下に動かし始めた。

抜けるギリギリまでペニスを引き抜き、そこから一気に腰を落とすので、その度に俺はその快樂に耐えるように低く呻く。そんな俺の反応を見てダリアが嬉しそうに微笑み潮を噴いた。

規則的な肉と肉がぶつかり合う音にダリアは何やらうっとりしているが、こんなものは足りない。俺はダリアの尻を掴んでそのまま立ち上がった。

「あんっ！ 深い！」

すると、ペニスは今までとは比べ物にならない程腫の深い場所に入り込み、それでも俺は腰をダリアの中に押し付ける。

「ほら、さっさと下りて、こい」

その言葉にダリアが一瞬キョトンとした顔をした。次いで意味を理解したのか、顔を真っ赤にして俺から視線を逸らす。

「なに、言って……」

「赤いぞ」

こいつのこういう所が良い。気丈なのかと思っていたらふとした瞬間に素が出て照れた

り、それを必死に隠そうとする所が。俺の前で何も取り繕わない、こういう所が。

「う、うるさい！」

いよいよダリアの子宮が下りてきた。狙いを定めるかのように入念にダリアの子宮口を下から揺さぶり続けていると、とうとうあの場所にペニスの先端が入り込む。

子宮の後ろ側にある窪みが開くのは、相当気持ちよくなれないと開かないらしい。その場所を俺にだけ許すのかと思うと、胸が何かに締め付けられるかのように疼き出すから不思議だ。ついでに言うところこは相当気持ちが良い。

「あつ、あつ、んん、んうっ」

「くそ、持ってかれ、そうだ」

息も絶え絶えにダリアの身体を上げ下げすると、その度にダリアが嬌声をあげる。こんな時思うのは、こいつはこんなにも軽くて小さいのにどこにこんな体力があるのかと言う事だ。

ダリアは自重で最奥を穿たれ、入口付近ではGスポットを容赦なく雁首に刺激されてその度に細かく潮を噴く。

「あつ、い、いきそう！」

「ああ、イけ」

「あつ、や、まだ、あつ、あああああ！」

俺が言った途端、ダリアは初っ端から派手に潮を噴いて絶頂した。

ダリアの身体は壊れたように痙攣し、膣の中はまるで渦のようにペニスを締め上げてくる。膣内の収縮と痙攣がはつきりと分かるほどダリアの中は感じていた。

ところがダリアは俺にしがみついたまま耳にそつと舌を這わせた。

まさかこのタイミングでそんな事をされるとは思ってもいなくて、せつかく我慢していたのに俺は低く呻いて一瞬動きを止めてしまう。

ああ、無理だ。俺はダリアを強く抱きしめて子宮口に亀頭を押し付けると、その快楽を一気に解放した。

「っ！」

「ああ！」

その感覚に肌が粟立つ。ダリアはほんの少しも精液を漏らすまいと両足で俺の腰を掴み、自ら最奥に押し付けてくる。

この満足感は何なのだろう。どうしてこんな些細な事がこんなにも心を沸き立たせるのだろう。

俺は呼吸を整えながら言った・

「はあ、おい、足を離せ」

「やだ」

「……このまま歩くぞ」

「いいよ」

俺の首に顔を埋めたままダリアは答えた。それを聞いて俺が思わず笑い声を漏らして歩き始めると、ダリアは一步歩く事に身体を仰け反らせて嬌声を上げた。痛いのか苦しいのか、悲鳴と甘さが入り混じったような声がやけに加虐心を掻き立てる。

場所を移動して俺達がベッドに辿り着いた頃には、二人共下半身が愛液と精液と互いの潮でびしゃびしゃだった。それでも俺達はそんな事など気にもしない。

ダリアをベッドに降ろした時には既に俺のペニスをダリアの中で大きくなっている。抜かずにこんなにもすぐに回復するのはもう異常だとしか思えない。

「キスして、オズ」

「ああ」

クチュクチュと卑猥な音が耳を刺激し、より官能的な気分させる。

俺はキスをしながら一旦ダリアの中からペニスを引き抜くと、ふと思いつて尻の方にペニスを充てがった。

「オズワルド？」

「お前、こっちもいけるんだよな？」

「そ、それはそうだけど、オズのは——っっ！！」

返事を聞く前に俺は一気にダリアの尻を貫いた。

ダリアは思わず声を飲み込んで俺を見つめるが、俺はそんなダリアをほとんど睨みつける。

「はあ、ね、一旦、抜いて、くるし——」

「嫌だ。グレイに聞いた。お前、戦場で何人かにこっちも使わせたんだろう？」

「……だ、だって、二人とかで来るから、ああっ！」

思わずと言わんばかりに逃れようとするダリアの腰を掴み、俺はさらに奥深くにねじ込もうとした。

慎重に行き止まりの辺りを刺激していると、潤滑油が溢れてくる。それに気づいた俺は一気にダリアの尻にペニスを打ち込んだ。

すると何かを突き抜けた感覚がしたのでさらに奥に侵入していく。突き当りの辺りをグリグリと刺激していると、うっすらとそこが緩み始めた。

それに気づいた俺はダリアの腰を掴んでさらにペニスを押し込み、とうとうS状結腸を

突破する。

「あつ、だ、め、それ以上、無理、あつ、や、だ、あああああ！」

「つつつ！」

ダリアはとうとう背中を仰け反らせて息を呑んだ。同じように俺も息を詰め、思わず動きを止める。

「一応聞くが、大丈夫か？」

悲鳴も無いダリアが心配になって尋ねると、ダリアはトロンとした声で言う。

「だい、じょうぶじゃ、ない……何か、入っちゃいけないところ、んっ、入って、る」

「抜くか」

ダリアがそんな事を言うのは相当だ。そう思って尋ねたが、そこは流石ダリアだ。足を震えさせて身体を痙攣させながらも首を横に振る。

「なんか、良くなってきた、かも」

「……そうか。では動くぞ」

流石のサキュバスだ。そう思いながらゆっくりと腰を動かすと、その感覚に堪えられなくなってきたのか、ダリアが息を荒らげ始めた。

「あつ、ん、はあ、ああ！」

「つく、これは、また前とは違った感覚、だな」

ダリアが感じる度になが縮まるが、締め付け方が膣とは違ってゾクゾクする。ダリアの腰を挿んだままスピードを速めると、奥を突き抜ける度にダリアが苦しげな、でもどこか甘い嬌声を上げだした。

その声に、震える肩に、何かが込み上げてくる。そして――。

「っ！」

「あっ、ああ！」

低く呻いてダリアを抱きしめると、ダリアは身体を仰け反らせた。勢いよく最奥に射精してゆっくりとペニスを引き抜くと、ダリアはそのままぐったりと動かなくなってしまう。俺はそんなダリアを抱えて風呂へ行き身体を洗って湯船に浸かると、まだどこかぼんやりとしているダリアに後ろから問いかけた。

「大丈夫か？」

「うん、何とか……まだお尻ヒリヒリする」

「悪い。まさかS状結腸に入るとは思ってもいなかったんだ。だがお前の事だ。どうせ気持ち良かったんだろう？」

「S状……結腸？ そんなところに入ってたの!? まあ気持ち良かったけど！ ていうか、

なんでその事をオズワルドが知ってるの？」

俺のセリフにダリアはようやく目が覚めたと言わんばかりに目を丸くして俺を見上げてくる。

「戦場で何度か男ともヤツたからだが？」

慰み者の空気がなかった時などは男にも手を出す事がある。ダリアはそれを聞いてさらに驚いたような顔をしたかと思うと、すぐに何かに納得する。

「そうなの!? あ、そっか……男の人はお尻にも性感帯あるもんね……」

何を知っているのか、そんな事を言うダリアに思わず俺は怪訝な顔をしてしまった。多分、これは誤解されている。

「言っておくが、挿れる側だぞ？」

「なんだ、つまんないの。私が開発してあげようか？」

「いや、遠慮しておく。俺はする側の方が好きだ。それにやはり俺は女の方が良い」

この女ならきつと上手く開発するのだろうが、生憎俺にそんな趣味はない。

「それは残念。でもどうしていきなりお尻使ったの？」

ダリアは不思議そうに俺を見上げてくるが、理由など簡単だ。戦場でダリアは尻も使わせていたと聞いて腹が立ったからに過ぎない。

けれどそれをダリアに知られるのが癪で俺はそつとダリアから視線を逸らした。

「別に。単なる気まぐれだ」

「ふうん？ 変なオズワールド。……ねえオズ」

「なんだ」

嫌な予感がする。そう思いつつダリアを見ると、ダリアはすつかり俺の胸に凭れて目を閉じているではないか。

「眠い」

「は？ おい！ またか！」

これでもう何度目だ。一緒に風呂に入ると最近ダリアはいつも寝落ちてしまう。一度湯船に放っておいてやろうか。そんな事を考えるが、結局いつもそれは出来ない。

俺はため息を落として笑いを噛み殺しながらダリアを抱き上げると、おでこに張り付いた髪を避けてそつとキスを落とした。

「おやすみ、ダリア」

ダリアの身体を拭いてナイトドレスを着せてベッドまで運ぶのにも慣れたものだ。そしてこんな事を毎回やらされてるせいで、もしかしたらドレスを脱がすよりも着せる方が早くなっただけかもしれない。

それでも嫌な気持ちになどならず、むしろ仕方の無い女だと笑いが込み上げてくるから不思議だ。

翌朝、枕元に置いてある電話が鳴った。

抱きしめていたダリアを放して電話に出ると、相手はグレイだ。事情を聞いて俺はすぐさま着替えると、寝室を出てアーノルドとセルクを部屋に呼びつけた。

「こんな朝っぱらからどうしたの」

「おはよう！ 良い朝だな！ お、グレイも来てたのか」

「おはようございます、隊長、宰相さま。こちらが今朝の動きです。城の中に居たスパイは五人。ですが、こちらが事情を聞く前に全員が服毒しました」

「だ、そうだ」

ソファに凭れてため息をつきながら髪を書き上げると、アーノルドとセルクも分かっていたとばかりにソファにどかりと座った。

「グレイ、自害した奴らが使った薬のリストを貸してくれ」

「はい。こちらになります」

そう言ってグレイは一枚の鑑定書をテーブルの上に置いた。その鑑定書を全員で確認している、そこへダリアがやってくる。

「あれ？ グレイさんじゃん。やつほー！」

そう言つて意気揚々と部屋に入つてきたダリアの格好はナイトドレスのままだ。それは仕方ない。ダリアの着替えは俺達が居る場所の後ろにあるクローゼットの中なのだから。

案の定、突然現れたナイトドレス姿のダリアをみてアーノルドとセルクはギョツとしたような顔をしているし、グレイなど両手で顔を覆つて叫ぶ。

「ん？ う、うわああ！ お、お前何て格好で出てくるんだ！」

「お前たち、見るな。ダリア、戻れ」

俺の声を聞いてダリアはそそくさと寝室に戻つたのを確認すると、クローゼットの中から一着のドレスを持つて寝室へと向かう。

「ありがとう」

「——ああ」

悪びれる事もなくいつもの笑顔を浮かべてドレスを俺の手から受け取るダリアを憎らしいが可愛いと思つてしまう俺はどうかしているのかもしれない。

けれどやはりダリアの言わば下着姿をあいづらに見られたのは癪だ。

俺はダリアを見下ろして文句の一つも言つてやろうと思つたのだが、キョトンとした顔をして小首を傾げられて口を噤んだ。

その代わりにダリアの顎を掴んで上を向かせると、無理やり口付ける。

「なに？ んんっ！」

唐突に唇を塞がれて驚いたのか、ダリアは驚いたような顔をして俺を見上げてきた。そんなダリアを睨みつけてようやく出た一言は――。

「この、馬鹿」

ただだった。この一言に全てが詰まっている。

「は!？」

案の定ダリアは突然の子どものような悪態に驚いたような顔をしているが、俺はそれを無視して部屋へ戻る。

しばらくしてようやく着替えたダリアが寝室から出てきて、今度はきちんと挨拶をした。

「おはようございます。で、皆して何睨んでるの？」

「おはよう、サキユバスちゃん。君の助言に従ってスノーさんの今後の予定は押さえたよ」

「それは良かった！ スノーには幸せになってほしいからね！ で、何見てんの？」

「サキユバス、お前には恥じらいというものは無いのか？ さっきのあの格好は何だ。ロミさんが見たら発狂するぞ」

「ロミちゃんは私のどんな格好見ても、もう驚かないもんね！ ていうか、誰か質問に答

えてよ！」

「お前には関係の無い話だ。さっさと朝食でも食って来い」

言った所で変に不安がらせるのもどうかと思ひそう言うのと、ダリアは納得したように頷いて苦笑いを浮かべる。

「あ、お城の奴か。ごめんごめん。それじゃあ行ってくるね」

「ああ」

ダリアは部屋を出る直前、ふと振り返って俺に尋ねてきた。

「帰りに厨房でカクテルの材料貰ってくるけど、オズ、何が良い？」

「そうだな、レッドアイが良い」

一度飲んだが、あれは美味かった。トマトは大好物だ。

「分かった。それじゃあ行ってくるよ！」

「ああ、行って来い」

ダリアを送り出してまた鑑定書を見つめていると、正面から呆れたようなアーノルドの笑い声が聞こえてくる。

「いや〜びっくりした。普通にナイトドレスで出てくるんだもん」

「どうして寝室にクローゼットを置かないんだ？」

「お、王、ダリアはいつもあんな格好でウロウロしてるのですか？」

皆先ほどのダリアの格好が気になって仕方がないのだろう。俺はため息をついて説明した。

「寝室にもクローゼットはあるが、そこは俺専用だ。そもそも抜け道があるからあまり入れられない。それからダリアは大体あの格好でこの部屋をウロウロしているぞ。だから俺はあの一角にわざわざカーテンを付けて執務室にしたんだ」

そう言っただけで部屋の隅を指差すと、そこにはこぢんまりとしたスペースが区切られている。それを見てセルクがぼつりと言った。

「お前、王なのにあんな所に押しやられてんのか」

「ああ。別に仕事をするだけだからな。あれぐらいが丁度いい」

「……そうか」

「セルク、オズは昔からこうでしょ？ あれぐらいのスペースで十分なんだよ」

「そうだな。こいつの趣味と言えど今も昔も読書だしな」

「ですが王、あのスペースは何なんですか？」

グレイが指さした先には俺の執務室よりもずっと広い何も置かれていないスペースがある。

「あれか？ あれはダリアの体操スペースだ」

確かヨガ、だったか？ それを思い出しながら言うと、今度はアーノルドとグレイまで悲壮な顔をする。

「どうしてサキュバスちゃん専用スペースの方が広いの」

「そ、そうですよ王！ 王はダリアを甘やかし過ぎでは!？」

「別に甘やかしてなどいない。あいつは毎日新しい酒を作っては体操をして風呂でサウナとやらをして下着でウロウロするだけだ。別に問題ない。それに散財もしないしな。そういう意味では金の全くかからない女だ」

「買い物をしてこいと言って金貨を渡してもその大半は戻って来る。もっと使っても良いといくら言っても、ダリアは散財をしないのだ。」

「まあ確かにダリアちゃん趣味は大体ここで完結してるもんね。そういう意味では良い王妃になりそうなんだけど、彼女の場合は人格がちよつとね……」

「そうだな。気は利くし気安いし庶民からも人気は出そうなんだが、人格がな……」

「あと言動も駄目ですね……」

「お前たち、言いたい放題だな。だがその通りだ」

人格と言動という部分は俺も擁護出来ない。それぐらいダリアの人格は破綻しているけ

れど、俺には丁度良い。

「それで話は戻るが、この薬はあれか。ダリアが飲んだ奴か」

「そうだね。全く同じものだよ。何とロットも同じ。間違いないかオリガが入手した所から仕入れてるよね」

「ロットも同じだと？ それは同時期にまとめて購入したという事か？」

「そういう事。オズ、次の戦争の準備を今からしておいた方が良いね」

「そうだな。ついでに城下町のスパイもあぶり出したい。何か案を考えておいてくれ」

俺の言葉に皆は頷いて部屋を出て行った。それと入れ違いにダリアが戻って来た。

「なんて事があったのよ」

食堂でロミとスノーと話した事を教えてくれるが、はっきり言って全く興味がなくて鼻で返事をする、ダリアは少しだけ頬を膨らませながらトマトを潰している。

「で、皆もう帰っちゃったの？ せっかく沢山トマト貰ってきたのに」

その言葉に俺は頷くと言う。

「どのみち今から仕事だ。あいつらは酒など飲まないだろ」

「え！ じゃあ今から作らない方が良かった？」

「俺は別にそれぐらいでは酔わないから構わないが、あいつらは真面目だからな」

「というか城では執務中に酒を飲むなんて事は俺でもしないが、あんな顔をして目の前で作られたら飲まない訳にはいかない。」

「何だかんだ言いながら機嫌の良いダリアを見ているのが好きなのだ。」

「なるほど。それじゃあ少しだけにしとくね。夜にまた作って飲も」

「そうだな。ところでダリア」

「俺は先程の報告を聞いてある決心をした。」

「なに？」

「お前、やはり側室候補にならないか？」

「ならないよ。なんで急にそんな事聞いてくるの？」

「ここがスパイの温床になっている可能性があるからだ」

「その言葉に案の定ダリアは驚いたようで、思いつきりトマトを握りつぶしている。」

「ええ!？」

「今朝、城から連絡が入った。スパイだと思われる者たちが投獄された、と。そしてその

まま牢の中で自害を図ったんだ」

「し、死んじゃったの？」

「ああ。お前も飲んだ、あの痛み止めを使ってな」

あれを仕入れたのはオリガだ。オリガとスパイ共が同じ薬を、しかも同じロットの物を入手したとなれば、オリガは完全に黒と言ってもいい。

「あの痛み止めてヤバイぐらい意識すぐに失う奴!？」

「そうだ。捕まったスパイは5人。そしてその5人とも同じ薬を使った。あの原材料を卸しているのはこの国では2社しか無い。一つはあの避妊薬を作っている会社でもう一つは製薬会社だ。避妊薬の方は原材料も国産で基準値がしっかりしているが、製薬会社の方は調べてみると材料の原産国が隣国で含有量が基準値の倍以上だった事が判明した」

「それは何かまづいの？」

「ああ。三年前から国産だと虚偽の申請をしていたんだ。まづいでは済まない。そしてスパイ達が使ったのはこの製薬会社の方のだったんだよ」

「それがどうしてここが温床になってるって言う話になるの？」

「オリガが言っていた業者が、まさにその製薬会社だったからだ」

「もしかしてオズワルド、オリガさんを疑ってるの？」

「分からない。俺は王だ。滅多な事では誰も信用しない。出来ない」

これは嘘だ。ダリアはオリガを信頼している。だからまだはつきりと告げる事は出来ないが、そもそもオリガはここへやってきた経緯が怪しい。

ダリアはカクテルを手早く作り上げて俺に一つ手渡して言う。

「やっぱり狙われてるのって私とあなた？」

「ほぼ間違いない」

むしろそれ以外に居ないだろう。俺の言葉にダリアは深くため息をついてソファにドサリと座り込んだ。

「そつか……はあ……」

「そんなに側室係が嫌か？ それとも相手が俺一人になるのが嫌なのか？」

あからさまに嫌そうな顔をするダリアに内心複雑に思いながらも尋ねると、ダリアは意外にもすぐさま首を振った。

「違うよ。むしろ最近はおズワルド以外と寝たいなんて思わなくなっちゃったよ。そうじやなくて、身の丈って言うのかな。ついこの間まで街灯の下に立って客取ってたような奴がさ、いきなりお城での生活なんて出来る訳ないよね？」

それを聞いて俺は一瞬呆気にとられてしまった。今までダリアが側室を断るのは相手が俺だけになるのが嫌なのだと思っていたが、どうやら全く違っていたようだ。

「なんだ、城で暮らすのが嫌なだけか」

それを聞いて俺は思わず頬を緩めた。

「まあ、そう」

「自由人だもんな、お前。ではお前は離宮に住むと良い。城の敷地内ではあるが城とは隔離されている。元は両親が使っていたんだが、そこなら誰にも干渉はされない」

そんな理由で側室を断っていたのであれば、対処のしようなどいくらでもある。俺の提案にダリアはパツと顔を輝かせたが、すぐに怪訝な顔をする。

「でも命狙われてるんでしょ？ 私。そんな所に一人で暮らしてて構わないの？」

「別に一人で住めとは言ってない。俺もそこに移る。むしろ命を狙われている者同士、お前は唯一信頼出来る相手だ。そしてそれはお前にとってもだろ」

「確かに」

そもそもダリアを元より1人きりにするつもりもない。こいつは1人にしたら何をしでかすか分からないからだ。

俺の言葉にダリアは笑顔を浮かべて尋ねてくる。

「毎日一緒？」

「ああ」

「朝から晩まで？」

「昼は流石に城で公務をするが、夜は離宮に戻る」

その言葉を聞いてダリアは安心したような顔をして隣に腰掛けると、俺の肩に頭を乗せてくる。その途端、ふわりとダリアの花のような甘い香りがした。

「たまには買い食いしに行こうね」

「なんだ、出かけたいのか？」

あまりにも些細なおねだりに思わず俺が笑うと、ダリアは間を開けず答えた。

「うん。デートしたい」

「デート、な。お前、俺が王だって事たまに本気で忘れていないか？」

相変わらず簡単にデートに誘ってくるダリアがおかしくて思わず問いかけると、ダリアも笑いながら返してきた。

「忘れてるかもしれない」

「そうだろうな。まあ、畑や牧場よりはマシだな」

「そだね。はあくこでもビッチ先輩って呼ばれたかったな」

「……お前な。俺が呼んでやろうか？ ビッチ先輩」

こういう所がダリアは本当に破綻していると思うが、これこそダリアだという気もする。こんな風に考えるようになってしまった俺も相当な人格破綻者だ。

「オズに呼ばれても嬉しくないよ！」

からかいと呆れが混じった俺の言葉にダリアは俺の膝を軽く叩いて、レッドアイを一気に飲み干していた。

そして翌日、俺はまだ惰眠を貪っているダリアの布団を勢いよく剥がすと、寝ぼけ眼で布団を探すダリアに言った。

「行くぞ。準備しろ」

「んー……おはよ。行くってどこに？」

うっすらと目を開けたダリアに俺は静かに言う。

「離宮だ」

「もう!？」

「ああ。さっさとしろ。着替えるだけでいい」

「はあ!？」

ダリアが何か抵抗する前に予め持ってきておいたドレスをダリアに渡すと、着替えるのを待ってダリアを担ぎ上げた。

そしてそのまま馬車の中にダリアを詰め込む。

「……何にも持って来てないんだけど……」

「構わない。グレイが後で全て運び込んでくれる。そもそもお前の荷物などほとんど無い

「だろ？」

「そりやそうなんだけどさ……」

腑に落ちないと言わんばかりのダリアに俺は肩を竦めて言った。

「なんだ、まだ不貞腐れてるのか。菓子でも買っていくか？」

「えっ？ うん！ どこのお菓子？」

「……単純な女だな。そこは宝石が良いとでも言っておけば良いものを」

菓子の一つでこんな顔をされると何だか返って罪悪感が湧いてくるのだが、そんな俺にダリアは真剣な顔をして言う。

「私思ってたんだよね。もう一回も全財産盗られてさ、結局物は盗られたらおしまいなのよ。

でも食べ物はどうじゃない。お腹の中に仕舞える。だからもう贅沢する時は食べ物にする事に決めたの」

「至言だな。その通りだ。物はいつか壊れるしな。物質社会は儂いものだ」

全く持つてダリアの言う通りだ。珍しくダリアの言う事に共感した俺は、御者に行き先を変えるよう告げた。

そんな俺にダリアは不思議そうな顔をして尋ねてくる。

「どこ行くの？」

「最近評判の良い菓子屋だ」

「凄いいじゃん！　そういうのちゃんと知ってるんだね」

あまりにも手放しに褒められて思わず俺はそっぽを向いてしまった。本当はグレイに聞いただけだ。

「いや、少し前にグレイに聞いたんだ。あいつの嫁は情報通だからな」

「そうなの？　何でまたそんな事わざわざ？」

突然のダリアからの返しに俺は思わずバカ正直に返してしまふ。

「お、お前が夜になると甘いものが欲しくなるなどと言うから！」

「……それで調べてくれたの？」

俺の言葉が意外だったのか、ダリアは俺の顔を覗き込んできて微笑む。その顔は馬鹿にしているでもなく、からかっているでもない。あまりにも甘くて柔らかい笑みに思わず見惚れていると、ダリアは突然俺に抱きついてきて俺の頬に自分の頬を擦り付けてきてキスしてくる。

「ありがとう！　オズのそういうとこ大好き！」

「そういう事を軽々しく言うな。勘違いする男が居たらどうするんだ」

こいつのこういう所に俺はいつもヒヤヒヤする訳だが、当の本人にはいつも全く伝わら

ない。

「えー！ 誰もそんなのしないよ！」

おかしそうに肩を揺らすダリアに呆れながらもそんな話をしていると、あつという間に話題の菓子屋に到着し、ダリア渋る俺を引きずり出して菓子をあれこれ選んで馬車に戻った。

「お店の人、変な顔してたね！」

「ああ。悪いことをしたな」

そりや突然何の前触れもなく王がやってきたら怯えるだろう。そう思うが、ダリアはフンと笑って胸を反らせる。

「でもオズワルドにだってお菓子買う権利はあるからね！ いつ誰が来ても良いように心の準備はしておかないと」

「そういうものか？」

「そういうものだよ！」

この女にそう言われるとそれが正しいような気がしてくるから不思議だ。自分でも理由はよく分からないが、ダリアの言葉はいつもスツと俺に馴染んでくる。

ダリアは既に焼き菓子の封を切っているのを見て、俺は無言でそこから一枚クッキーを

抜き取った。

なるほど。グレイの嫁の美味いものレーダーはなかなか優秀なようだ。

そんな事をしているうちにようやく城に辿り着いた。

離宮は城の門をくぐり更に庭を迂回した場所であり、高い壁に囲われている。

馬車から降りたダリアは目の前に聳え立つ白亜の美しい絵画にでも出てきそうな建物と、それを取り囲む高すぎる壁を見上げてため息を付いた。

「凄い高い壁……これ離宮じゃなくて要塞だよな？」

「外から覗かれないようにとの配慮だそうぞ。一体中で何をしていたんだかな」

冷たい声で言うと、ダリアが不思議そうな顔をして首を傾げている。

「昨日も言ったが、ここは俺の両親が使っていたんだ。元々は側室達の為に造られたらしいが、両親はここで自分たちの愛人を囲っていたんだよ」

「ん？ 両親の愛人？ それってお互いの愛人が一つの離宮に住んでたって事？」

「ああ。男も女も同じ場所で囲われてたんだ。間違いが起こらない訳がないと思わないか？」
「思う」

「その最たる間違いが俺だ。俺は離宮で生まれた。父親が王という事にはなっているが、本当の所は誰にも分からない」

恐らく、俺は王の子ではない。それでも王は俺を認知した。理由は見た目と剣術の腕前だ。

それを聞いてダリアはゴクリと息を呑んで俺に問いかけてくる。

「え……もしかしてそれも有名な話？」

「超がつくほど有名な。誰も俺を王の子だとは思っていない。俺自身もな。だが俺は王に選ばれた。それは今が戦乱の世だったからに過ぎない」

「そうだったんだ……で、まずは両親たちを失脚させたって事？」

「ああ。そして離宮の愛人共を解体し、結婚にまつわる法律も変えた。俺のような子どもがもう二度と生まれないようにな」

言いながら俺は窓の外に目を向けた。

もうここを見ても何の感慨もない。高い壁に囲まれ、香水の匂いと精液や愛液に塗れたあの空虚で虚栄に満ちた世界に戻るつもりもない。

離宮を真顔で見つめていた俺を見てダリアは何か思う所があったのか、おもむろに口を開いた。

「私思うんだけど、やっぱいつまでも世襲はよくないよ。だってさ、代を追う毎に大抵おかしい事になってくじゃん？ だからオズワルドはむしろ王の子じゃなくて良かったんだ

と思うよ」

それを聞いて俺は思わずダリアを凝視してしまった。この話を聞いてそんな事を言う奴は今まで誰一人居なかった。

むしろ王の子じゃなくて良かっただなんて、なんて事を言うのだ。

「その発想は無かったな」

哑然として呟いた言葉にダリアはニコッと微笑んで言う。

「そう？ 苦労して努力しまくって上り詰めた人と親の加護だけで上り詰めた人じゃやっぱ覚悟とか全然違うもん。だからオズワルドはそれで良かったんだよ。で、早く隠居して私の夢叶えて！」

「……お前という奴は本当に……どうしようもないな……っふ、はは！」

一瞬呆けてしまったが、堪えられなくなるとどうとう声を出して笑ってしまった。

そうか、俺は王の子じゃなくて良かったのか。こいつは誰の子かも分からなくて孤独だった俺の努力を認めてくれるのか。

それに気づいた途端、心の中の闇が一気に晴れ渡っていく気がした。

ついでに最終的にはやっぱり腹上死を迫ってくるダリアに芯のブレない女だと感心してしまったのはここだけの秘密だ。

「ここに入るのはあの二人を追放して以来だが、管理だけはしていたんだ。いずれ俺の側室をここに移動させようと思ってるな」

「そうなの？ そんな所を私が使っちゃっていいの？」

「構わない。どうせ俺はもうお前以外抱く気もない」

俺の言葉にダリアは一瞬目を見開いたかと思うと、顔を真赤にして俯いてしまう。時折見せるダリアのこの年相応の反応が堪らない。

けれどそれをからかうとダリアは拗ねるので、俺は気付かない振りをして歩き出すと、ダリアはその後を小走りですいてくる。

離宮の中に入るなり、ダリアは苦笑いを浮かべてぽつりと言った。

「ゴツテゴテだね」

「ああ。吐き気がするだろ」

「流石にそこまでは言わないけどさあ……節操無さ過ぎ無い？ 私の前世で言う和洋折衷ごちゃ混ぜじゃん」

「この置物から見ても分かる通り、節操の無い人間が使ってたんだよ。さて、では案内しようか」

和洋折衷というのが何かは分からないが、ここに住んでいたのは節操が無くて滅茶苦茶

な奴らだったのだ。そりゃこんな統一感の無い場所にもなる。

「うん！」

嬉しそうにダリアはついてくるが、そんなダリアに俺は言った。

「部屋は二階に山程あるが、お前の部屋はもう決めてある。ついて来い」

「えー！ 山程あるんなら私も自分で部屋選びたいよ！」

そう言うだろうとは思っていたが、俺はそんなダリアを軽く睨んだ。

「うるさい。お前の部屋は俺の部屋の続き部屋だ。でないと夜中に離宮を抜け出して城の使用人の誰かに夜這いをかけに行くかもしれないからな」

「そんな事しないってば！ ていうか、オズが居るんだからそんな事する訳ないでしょ！」

「だったらなおさら続き部屋で良いだろうが！ つべこべ言ってるど担ぐぞ」

「自分で歩くよ！」

拗ねるように唇を尖らせて文句を言いながらついてきたダリアだったが、部屋を見た途端満面の笑みで頷いた。

「うん、ここで良い！」

「そうだろ。お前が喜んでた部屋の内装をオリガに聞いたんだ。足りない物があればその都度言え」

「分かった！ やば！ ね、ね、あのカーテンもしかして総レース!?」

「さあ？ そうなんじゃないか？」

「すっご！ ねえ見てよオズ！ これ透けてんだけど！」

「あまりはしゃぐな、みつともない」

「だってすっごい——ベッドの弾ね方尋常じゃないんだけど！」

ベッドの上で転がってはしゃぐダリアを見て俺苦笑いを浮かべて言う。

「話を聞け」

「ね、オズワルドの部屋も見ていい？」

「構わないが、あまり弄るなよ」

「うん！ ちょっと色んなシチュエーション考えるだけー！」

「……だから、おかしい内見の仕方するなよ」

どうしてこいつの頭の中にはそれしか無いのだろうか？ いっそ不思議に思うが、ここま
で喜んでもらえる、あれほど嫌いだった離宮も悪くないと思えるから不思議だ。

「ここ、使用人の人とか居るの？」

「一応な。だがここの使用人は皆、城からの通いだ。古株で俺の専属のような奴らに任せ
てある。ただ……」

そう言っただけでちらりとダリアを見ると、ダリアはキョトンとした顔をしてこちらを見上げてくる。

「なに？」

「全員男なんだよな……お前、絶対に手を出すなよ？　言っておくが、全員既婚者だからな？」

「分かってるってば！　でもオズワルドの身の回りの世話も男の人がしてたの？　メイドさんとか居なかったんだ？」

「ああ。女を王の側におくのは危険だろ。何か手違いがある……かもしれない」

「あつたんだ」

「二代前の王がな。まあそういう所は俺も人のことは言えないが」

「女好きって事？」

「せめて性欲が強いと言ってくれないか。別に俺は女が好きな訳じゃない。抱くのが好きなだけだ」

「なるほど。私と一緒にか」

「ああ。……いや、お前と一緒に言われると少し違う気もするが」

「どこが違うの！　一緒にでしょ!?　要はセックスが好き！　そんだけよね？」

「そうなんだが、俺は別に腹上死するまでセックスをしたいとは思わないぞ」

「えー！　なんで？」

「なんでと聞かれても困るが、俺は普通に死にたい。とにかくそういう訳で俺の周りには皆男で固めてあるんだ。だが、やはり使用人を昼に入れるのは危険だな。掃除は夜に、食事はここまで運ばせるか。それか俺がここで仕事をするか、いつそ閉じ込めておくかだな」
やはり安心出来ない。昼間でもダリアを1人にするのは不安しかない。そんな俺の心配をよそにダリアが吹き出した。

「大丈夫だってば！　悪さしないから安心してよ！」

「……本当に？」

「本当だよ！　私だってオズワルドとするのが一番気持ち良いんだから。それに気づいたんだけど、オズワルドとするとかなり性欲発散されるみたいなんだよね」

ダリアはそう言って最近の心境の変化を語ってくれた。どうやら最近俺だけで満足するらしい。

それを聞いて俺は思わずダリアを凝視してしまった。

ダリアの中で俺の存在はどうなっているのだろうか？　もしかしたら少しぐらいは俺がダリアを思うように、ダリアも俺を思ってくれているのだろうか？

うっかりそんな事を考えてしまった自分が恥ずかしくて俺はそっぽを向く。

「どうしたの？」

「別に。だつたら信じるぞ。裏切るなよ？」

「大丈夫だつてば！ そんなに心配なら本当に閉じ込めて行ってもいいよ」

「……いや、それだとお前の部屋の掃除が出来ないだろ。閉じ込めはしない。だが、誰にも会わないようにしておけ」

「分かった」

こうして、俺達の離宮生活が始まった。

あれから二週間が過ぎた頃、俺は昼間は城で仕事をして夜には離宮に戻るといふ生活をしていた。もちろんほぼ毎晩ダリアを抱き、休日には誰にも邪魔される事なく快適な生活を送っていたのだが――。

その日、俺はいつもと変わらず朝から書類仕事をしてから執務室で重鎮達の進言という名の愚痴を聞いていた。

「王、城に潜り込んでいたスパイはやはり隣国の手の者でした。早急に何か手段を考えませんか、このままでは内部から破壊されてしまいます！」

この国の重鎮の1人が言うのと、次々に同じような声上がる。

「では何か策はあるのか？ こちらに入り込んだ製菓会社には今数人のスパイを潜り込ませているが、未だ証拠が見つからない。今の状態であちらに宣戦布告などしたら、言い逃れをされて結局何も終わらない。違うか？」

「そ、それはそうですが……」

冷やかな俺の声に皆が黙り込む。そんな中、今度は別の重鎮が話し出す。

「次は私が。王、離宮を再開されたのは何かの作戦ですか？ それともただ女を囲う為ですか？」

そんな事を尋ねてきたのは側室候補の娘を持つ親だ。

「どちらも違う。あの女はお前たちも知っての通り、唯一俺の寵愛を受けている女だ。サロンの実態が分からない今、あそこにあいつを置いておくことは出来ないから離宮に連れてきたままだ。離宮の再開ではない」

「ですが側室候補はどうします!？」

「俺は三年前に側室は全て解散したはずだ。再開を告げた覚えもない。勝手にそちらから候補だと言って送りつけてくるのだろう？」

「では王はいつまで経ってもご結婚をされないおつもりですか!？」

「今はまだそんな事は考えていない。それともお前の娘を抱き潰すだけ抱き潰して再起不

能にしても構わないのか？　言っておくが、今の俺の側室とは、俺の処理係に過ぎない。それでも構わないのなら離宮を再開しよう。だが、お前たちの娘が俺の子を妊娠する事は絶対に無いが」

中出しはしない。絶対に。それを告げるとようやく重鎮は齒を食いしばってドサリと座った。

どこの国もそうなのかもしれないが、子どもを使って政を手中に収めようなどと馬鹿げた事が、一体いつまでまかり通ると思っっているのだろうか。

むしろ俺達が反逆を起こしてそういう貴族を軒並み追いやった事をもう忘れたのだろうか。

「アルとセルクには伝えてあるが、城下町にも未だ多数のスパイが潜んでいる可能性がある。何か事を起こす時は必ず報告しろ。今日はこれで解散だ」

どのみち今の段階では何もする事が出来ない。迂闊に罠を張りあちらに感づかれてもしたらその時点で終わりだ。

その時だ。執務室に離宮の掃除係が血相を変えて飛び込んできたのは。

「どうした？」

冷たく問いかけると、掃除係は唇を震わせて頭を下げる。

「そ、それが、いつも通り離宮に掃除に行こうとしたら、覆面をした男達に馬車を乗っ取られて……」

「なに？」

「も、申し訳ありません！」

掃除係はガクガクと震えて俺の次の言葉を待つが、俺はそれを無視して部屋の入口を守っている騎士に言う。

「おい、すぐに馬を裏に回せ」

「は、はい！」

短い返事をして騎士は廊下を駆けていく。俺はその後を追いかけるように呆気にとられたような重鎮たちの脇をすり抜けて裏口に向かって走った。

裏口に回されていた馬に飛び乗ると、真っ直ぐに離宮に向かって馬を走らせる。

美しく刈り込まれたバラの垣根をいくつも飛び越え離宮にたどり着くと、俺を見て門番が慌てて門扉を開けた。きっと俺はそれほど酷い顔をしていたのだろう。

離宮の入口には見覚えのあるハンカチが落ちていた。ダリアの物だ。それがこんな所にあるという事は、ダリアは外で掃除が終わるのを待っていたのだろう。

俺はハンカチを拾い上げてまずは耳を澄ませたが、どこからも声や音は聞こえてこない。

「くそ、どこだ。ダリア！」

離宮に連れて来たのは失敗だったか？ 何度も命を狙われているダリアだ。ここならサロンよりはマシだろうと考えたが、もしかしたらダリアをここへ連れて来た事があちらを刺激した可能性もある。

俺は仕方なく一つ一つ部屋を確認する事にした。時間はかかるが、それしか方法は無い。幸いな事にダリアは日中他の部屋を見て回ったりする事はない。それは掃除が終わったタグを見れば一目で分かる。

二階の廊下を走りながら一つ一つ部屋のタグを確認していると、一つだけタグが外れている部屋があった。

耳を澄ませると中から数人の気配と、ダリアのくぐもったような声が聞こえてくる。

「ダリア！」

俺はドアを勢いよく開けて部屋の中の光景を見て息を詰めた。

「んん……？」

殴られたのか、涙目でこちらを見るダリアの顔は可哀想なほど腫れ上がっている。おまけに手足はベッドに括りつけられ、ドレスもコルセットも無惨に破かれていた。

そんなダリアを見た瞬間、俺の中から色んな感情が一気に湧き出て消えていった。俺は

すぐさま帯剣していた剣を引き抜き、冷たい口調で言う。

「ダリア、目を閉じていろ」

それだけ言って俺は覆面の男たちに無言で切りかかり、男たちの腕を容赦なく切り落とした所でグレイと数人の騎士達がやってくる。

「入るな」

その一言にグレイと騎士は何かを察したかのように頷き、俺が男たちを部屋の外へ引きずり出すのを大人しく待っている。

ダリアを襲った覆面の男たちは痛みと恐怖にのたうち回るので、二、三度蹴り上げて意識を失わせると、全員部屋の外へ足で蹴り出す。

その後ドアを閉めてダリアに近寄ると、手足を縛っていたロープ解き口を覆っていた布も取り去ってやった。

「目を開けてもいいぞ」

俺の言葉にダリアはゆっくりと目を開けて俺をじっと見つめてくる。

ダリアの頬に涙が伝い、華奢な身体は血と痣だらけだ。そんなダリアを見て堪らなくなつて俺はダリアを思い切り掻き抱いた。

「あの人達は？」

震える声で、けれどどこか気丈に振る舞おうとするダリアが痛々しい。

「運び出した。今から尋問だ」

「殺してない？」

「ああ。大切な証人だからな。だが、その後は死罪だ。俺の物に手を出した罪は重い」
「うん」

安心したような声でそれだけ呟いたダリアは、そのまま俺に体重を預けてきた。どうやら身体に力が入らないようだ。

「酷いな」

「うん……せつかく綺麗にしてるのにな」

おどけたようにそんな事を言うダリアに、俺も乗ってやる事にした。

この女は怖くても辛くても誰も頼らない。痛みや傷を全て隠そうとする野生の獣のようだ。

「全くだ。毎日毎日念入りにマッサージをしてオイルを塗り込んでいるのにな」

「ほんとだよ……見て、アザだらけ。顔もでしょ？」

「ああ。だが、湿布でも貼っていればすぐに案外可愛いお前に戻る」

冗談めかしてそんな事を言うと、ダリアが少しだけ笑った。

けれどダリアの身体の震えは止まらない。よほど怖かったのだろう。当然だ。女1人が複数の男に殴られ襲われるなど、一生忘れる事の出来ないトラウマになってもおかしくない。

むしろ泣き叫んだり放心しない事に心配になるほど、ダリアの心は強い。

そんなダリアは甘えるように俺の胸に顔を擦り寄せてきた。俺はそんなダリアの頭を抱え込む。

「仕事、戻る？」

「いや。ここで仕事する」

「側に居ていい？ 邪魔しないから」

「ああ」

ダリアを抱いて部屋に戻るとソファに座らせる。いつの間にか部屋には茶と菓子を用意されていた。きつと執事のセバスチャンだろう。騒ぎを聞きつけて飛んできたに違いない。

ダリアに新しいドレスを持ってきて着替えさせてやると、ダリアはようやく茶に口を付けて小さな息を吐く。

それを見て俺は執務机に向かうと、そんな俺にダリアが不思議そうに尋ねてきた。「どうして分かったの？」

「いつもの掃除係が執務室に飛びこんで来たんだ。誰かに襲われて馬車を奪われたと」

「そうだったんだ。でも部屋とかよく分かったね」

「お前、今まで気づいてなかったのか？」

「何が？」

「掃除係は一日で全ての部屋を掃除する訳じゃない。掃除を終えた部屋にはドアにタグを挟んで帰るんだ。そして俺に報告をする。本来タグがあるはずの部屋のタグが外れていたら、それは誰かが開けたという事だ」

「私かもしれないじゃん」

「お前はこの二週間、一度も他の部屋を開けてないだろ」

「何で知ってるの」

「俺はお前のそういう所は信用している。何せセックスにしか興味のないような女だ。金目の物には目もくれないからな。実際あの部屋のタグ以外は外れていなかった」

「どれほど金貨を渡そうが、金目の物が転がっていようが興味も示さないダリアが俺の許可無しに他の部屋をウロウロと歩き回るはずもない。」

俺の言葉にダリアは釈然としない顔をしている。

「……それはどうも。……ありがと、オズ」

「いや、これは俺の落ち度だ。やはりこちらに仕事道具を持ち込む事にしよう」
もうどこに居てもダリアは狙われる。それがよく分かった今、ダリアを1人にするのは危険だ。

「そんな事出来るの？」

「城には居るんだ。別に構わないだろ」

「そっか……そっか」

思わずと言わんばかりに微笑んだダリアを見て、ようやく俺は安心した。今の今までダリアの顔は緊張に強張り、引き攣っていたからだ。

そんな俺の視線に気づいたのかダリアが俯いた。

「あんまり見ないで。きつと酷い顔してるから」

「そんなに変わらないぞ」

「……それは流石に酷くない？」

「そういう意味ではない。後で軟膏を持ってこさせよう。いつものオイルの代わりに塗り込んでおけ」

頬を膨らませるダリアに言葉が足りなかった事を反省していると、ダリアが突然予想もしていなかった事を言い出す。

「うん。あゝあ、しばらくオズワルドともお預けか」

「何故？ 痛むのか？」

いや、何せ全身打撲だらけなのだから痛いには決まっているのだが、ダリアが自らそんな事を言い出した事に驚いてしまった。

「そうじゃなくて、流石に王様にこんなボロ雑巾みたいな身体見せられないよ」
それを聞いて俺はさらに呆れ返ってしまう。

「別にボロ雑巾だろうが何だろうがお前はお前だろ。俺は気にしない。痛むのであれば話は別だが」

「そうなの？」

「そうだろ。お前は俺の身体がボロ雑巾だったら嫌なのか？」

「ううん、むしろ勲章だと思っ」

「俺も同じだ。お前に傷がつこうがアザが出来ようがお前の価値は変わらない」

「……ありがと」

「つまらない事を気にするな。泣く子も黙るサキユバスなんだろう？」

「違っつてば！」

「はは！」

何を気にしているのかと思つたら、案外つまらない事を気にするものだ。

けれどそんな風に思つていたからこそ、いつも時間をかけて全身にオイルを塗り込み、体操をして爪の先まで綺麗に手入れしていたのかと思うと何かが胸に込み上げてくる。

馬鹿な女だ。身体など二の次だ。ダリアはどんな姿をしていても、どれほどの傷を負つても、もう俺のかけがえのない女だというのに。

それからしばらくして離宮に軟膏が届けられた。それを届けてくれたのは俺の執事だ。どうやらお茶だけ入れて軟膏を取りに戻つたらしい。

「本当に、本当に申し訳ありませんでした、ダリア嬢」

執事のセバスチャンはダリアに深々と頭を下げた。この男は数少ない俺とダリアの仲を応援してくれている男だ。

「大丈夫ですから！ それに誰のせいでもないって言うか、私が咄嗟に防御出来てれば問題無かつたって言うか……」

「防御？ お前が？」

ダリアの台詞に俺が首を傾げて尋ねると、ダリアは深々と頷いた。

「合気道習つてたからね！ でもそんなのすっかり忘れてたよ……」

「あいきどう？ 何かよく分からんが護身術のようなものか」

「うん。相手の力を利用して投げ飛ばす的な奴。投げ飛ばしたらすぐさま亀甲縛りだよ！」
「お前は男を縛り上げる事に関しては引く程手際が良いからな。残念だったな、技を披露出来なくて」

「ほんとだよ。そんな訳なので大丈夫です。軟膏ありがとうございます」

俺とダリアの会話を聞いていたセバスチャンがふと笑みを漏らした。

「王の言う通り、本当に普通に話しておられるのですね」

「？」

「気安いだろ？ 記憶が無くなっているとは言えなかなかの態度だと思うんだ」

「ですが王、ダリア嬢にお会いになられてからは以前よりも少しだけ取っ付きやすくなつたと言われていますよ」

「誰にだ」

「使用人にでございませす。私も嬉しゅうございませす。世間で何と呼ばれようとも私達にとつてあなたはあの地獄から救い出してくれた救世主ですから」

「……大げさだ。仕事中にすまなかつたな。戻れ」

別に俺が使用人たちを助けた訳ではないのに、セバスチャンを始め数人の使用人たちは今なおこんな風に乗俺を持ち上げてくるので居心地が悪い。

「畏まりました。それでは私はこれで失礼致します。ダリア嬢、お早い回復を祈っております」

「ありがとうございます」

ダリアの礼にセバスチャンは深々と頭を下げて部屋から出ていく。そんなセバスチャンを見てダリアがぼつりと言った。

「……軍の人たちとかグレイさんもそうだけどさ、やっぱりオズワルドは冷酷王じゃないよね？」

「何故？」

「だってあれだけ慕われてるんだもん。街でも思ってたんだけど、皆オズワルドの何を見て怖がってるんだろうね？ 顔かな？」

「失礼な奴だな。この顔は生まれつきだ」

突然何を言い出すのかと思ったら、ダリアの唐突な侮辱に思わず眉根を寄せると、ダリアは手を振って笑顔で言う。

「顔の造りじゃなくて表情だってば！ でもオズワルドはそのままが良いよ！」

「それこそ何故？」

「だって実はオズワルドが凄く優しい人だって分かったら、いつまでも引退出来ないでし

よ？」

「ああ、なるほど。そんな事になったらお前の夢がいつまでも叶わないもんな」

「うん！」

「……少しは躊躇え。何て利己的な奴だ。だがそれは一理ある。俺も早く隠居して夢を叶えたい」

あまりにも即答するのでダリアを軽く睨むと、小さなため息を落とした。

「夢？ そう言えばオズワルドの夢って聞いた事ない。何なの？」

そりやそうだ。俺の夢など誰にも言った事がないのだから。どうしても聞きたいのかダリアが俺の顔を覗き込んできた。

そんなダリアを見下ろして俺は不敵に笑う。

「何だと思う？」

「分かんない」

「そうだろうな。今はまだ秘密だ。いつか教えてやる」

今はまだ教えてなどやるものか。俺は負けそうな賭けはしない主義だ。

それだけ言っぺんを置いて立ち上がると、ダリアのおでこにキスをする。

「なに？」

「軟膏を貸せ。塗ってやる」

「え？ いいよ、今からお仕事でしょ？」

「今日の分はもう終わらせた。いいから来い」

それだけ言っただけ俺は問答無用でダリアを抱き上げる。

そして寝室に移動すると、ベッドに優しく降ろした。

「ほら、貸せ」

「い、いいよ！ 恥ずかしいから！」

「何が恥ずかしいだ。それに俺はもう今日は自由だ。途中で襲ってくれても構わないぞ」

「え？」

それを聞いて思わず顔を輝かせたダリアを見て俺は思わず呆れてしまう。

「お前な、あんな事をされた直後によくそんな顔が出来るな」

「そりゃそうだよ！ 怖かったし痛かったけど、オズワルドとするのは好きだもん！ 知

らない人に襲われるのは嫌だけど、セックス自体が嫌いになった訳じゃないよ。そんな事

になったら私のアイデンティティが失われちゃう！」

「とんだアイデンティティもあつたもんだ。つべこべ言わずに貸せ。今回は譲らないぞ」

「なんで！ 恥ずかしいんだってば！」

「俺のモノに勝手に触られ、挙げ句に傷つけられたんだぞ。どれほどの傷を負っているのか確認するのは当然だろう？」

俺は真顔で言いながらダリアに近寄ると、ダリアの手から軟膏を取り上げた。そしてそのままベッドに押し倒す。

「痛かったら言えよ」

「うん」

ようやく大人しくなったダリアの反応を確かめるように慎重に薬を塗って伸ばし始めた。

「痛いか？」

「ううん、平気」

「女の顔を殴るなんて、どんな神経をしているんだ」

「ああいう人たちは私達をサンドバッグか何かだと思ってるんだよ、きつと」

「こんな柔らかいサンドバッグがあつてたまるものか。こんなもので何が鍛えられるんだ」
言いながら俺は念入りに軟膏を顔に塗り込むと、今度は優しくドレスのボタンを外し始めた。

「コルセットはどうした？」

「紐千切られた。なけなしのコルセットなのに」

「では次は鍵のついた鉄で出来たコルセットでも着けるか」

「それ全身貞操帯じゃん！ そんなコルセット重くて歩けないよ！」

ダリアの言葉に俺は目を細めて口の端を上げる。良かった。いつも通りだ。そんな俺を見て何故かダリアが顔を背ける。

俺の指先がダリアの胸に辿り着いた頃、一瞬ダリアの身体が強張った。やはり思い出すか……そう思って触れるのを止めようとした途端、ダリアが身を振る。

「なんだ？」

「ん、気持ち良かった」

「……お前な」

呆れとも喜びとも言える不思議な感情だ。俺ならあんな事があつた後にこんな事は言えないし出来ない。

それでも俺は安心してた。ダリアがダリアではなくなつたらどうしようかといつも不安に思っているのは俺の方なのだ。ダリアの事を口ではあれこれ言うが、本当は俺はダリアよりもずっと臆病だ。だから安心してたくて仕方ないのだろう。

俺はまるでダリアを挑発するかのよう乳首にそつと指を這わせる。

「あん！」

「悪い。手が滑った」

「嘘、ばっか。んん！」

乳首を摘みながら俺はダリアの顔色を伺っていた。どこまで触れても良いのだろうか？ 怖がらないだろうか？ 拒絶されないだろうか？

そんな俺の不安を悟ったかのように、ダリアは自分から俺の首に腕を回すと、そつと頬に口づけて耳元で囁く。

「上書きして、オズ」

ダリアの言葉に思わず俺は固まってしまった。勘が良くて案外気遣いの女ダリアは、こんな時でも俺の気持ちを優先させる。

俺はそんなダリアがどうしようもなく愛おしくて片腕で強く抱きしめ返した。

「ああ、当然だ」

俺はダリアの上に跨ると、いつもよりも数倍優しく胸を揉み始めた。ついでに髪を撫で、殴られた所に当たらないように慎重に口づける。

「激しくても大丈夫だよ」

「馬鹿言うな。酷くなったらどうする。それにたまにはこういうのも良いだろ」

「お姫様にするみたいなの奴？」

「お姫様とした事が無いから分からないが、多分そうだ」

半笑いで俺が返事をする、ダリアもおかしそうに目を細めた。

ゆっくり口を開いたダリアの口内に舌を滑り込ませると、いつものような嘔みつくようなキスではなく、優しく歯列をなぞる。

「ん、んう、っふ」

ダリアの言うお姫様にするような、というのがどんな物なのかイマイチ分からないが、ダリアはいつものように襲いかかつては来ずに、大人しくキスを受け入れている。

顔も殴られているので痛くはないか心配していたものの、そんなダリアが新鮮で気がつけば俺は息を荒らげている。

長いキスを終えて着ていた服を脱ぎ始めると、何故かダリアが目を輝かせて俺の裸をじつと見つめている。

「傷、いっぱい」

「ああ、戦場なんかに出るとどうしてもな。なんだ、今頃気付いたのか」

今まで一体何を見ていたんだと言いたかったが、次に続くダリアの言葉を聞いて俺は納得した。

「そう言えばあんまりまじまじと見たこと無かったかも。いつも私が襲って無理やり服脱がしてたし」

「そうだな。いつものお前はまるで追い剥ぎだ」

「言い方！ ……綺麗だね、オズワルド」

「あまり見るな。お前の言うお姫さまはそんなにも男の裸を凝視するのか？」

思いがけないダリアからの褒め言葉に俺は思わず顔を背けて言うと、ダリアはすぐに答えを返してくる。

「お姫様だつて男の裸大好物だよ。多分」

「どんなお姫さまだ。まあでも中身がお前ならそうだろう」

それは間違いない。何せ追い剥ぎのような服の脱がし方をしてくるような女だ。こんな姫が居てたまるか。

「どういう意、あんっ！」

服を脱ぎ終えてもまだ俺の裸を凝視しているダリアの乳首を何の前触れもなく口に含むと、ダリアは抗議しながらも身体を震わせた。口内で転がして甘く噛むと、ダリアの腰が浮く。

そんなダリアの腰を抱き寄せると、ダリアは懇願するような顔をしてこちらを見上げて

きた。その顔に胸が甘く疼く。

「はあ、んっ」

「随分気持ちよさそうだな。もう出来上がってるんじゃないのか？」

「い、言わないでよ」

何だかいつもと勝手が違って戸惑うが、たまにはこんな普通のダリアも良い。

俺は乳首を甘噛しながら下腹部を撫でると、途端にダリアの口から甘い声が漏れた。

「あ、そこ、駄目だっつて」

「どうして？ 腰が跳ねてるぞ」

腹を軽く揺さぶるだけで感じるダリアに感心しつつ、そのまま下肢の間の陰核に指を這わせると、ダリアは一層強く背中をしならせた。

「ひゃんっ！」

すっかり濡れたダリアの膣からは既に大量の愛液が溢れかえっている。今すぐにその中にガチガチに固くなって痛みすら伴っているペニスを突っ込みたいが、今日はお姫様のようになると決めたからには、そんな乱暴な事はできない。

俺はいつもよりも念入りに陰核を撫でた。その度にクチュクチュという水音が聞こえる。「お前は感度が本当に素晴らしいな」

「そんな、褒め方、初めてされた、よ。んんっ！」

既に肩で息をしているダリアを見ていてふと思ひ立ち、俺はダリアの腰を放して足の間
に顔を埋めた。

すると鼻先にダリアのヒクつく膺口が見える。

「なに、して……」

「いつものお返しをしてやろうと思っただけ。それにセックスは何度もしてきたがこれはし
た事が無かったからな」

こんな所を舐めたいと思っただけ。した事もない。

けれど不思議とダリアの物であればしてみても良いような気がした。むしろ、どんな反
応をするのかが見てみたい。

「当たり前、でしょ！ あなた、王様だよ!？」

必死に抵抗しようとするダリアを腕で抑えて舌先を陰核に這わせると、指先で弄った時
とはまた違う反応をダリアが見せた。一舐め毎にダリアの腰はビクビクと痙攣し、俺を誘
うかのように愛液が中から染み出して来る。

「ああっ！ だ、駄目、イキそう！」

ダリアは両足を立ててつま先に力を入れた。それに気付いて足の間からふとダリアを見

ると、戸惑うような恥ずかしがるような顔をしたダリアがこちらを見ている。

その顔がもっと見たくてついでに指を膺に差し入れGスポットを刺激すると、ダリアが身体を強張らせて泣き出しそうに顔を歪めた。

「やっ、ほんと、に、イツちゃう……や、あああああ！」

イキそうだと言ってからダリアはすぐさま絶頂を迎え、派手に潮を噴いて達してしまった。がつくりと力が抜けたダリアの足の間からダリアの上に戻ると、悔しそうな切なそうな顔をするダリアを見下ろして尋ねる。

「どうだった？」

こんなダリアは新鮮だ。いつもイク時は大抵一緒にイクのであまりこんなダリアを見る
ことが無い。

「気持ち……良かった……」

それを聞いて俺は満足げに頷いた。

「それは良かった。誰かのこんな所を舐めたのは初めてだったが、思っていたよりも何の味もしないな。まあ特に匂いもないもんな」

「そうなの？」

もっと独特の味がするのかもしれないが、案外何の抵抗もなかった。むしろ何故か

甘く感じたのは相手がダリアだからだろうか。

「ああ。舐めたいなどと思った事もなかったしな」

「そう、なんだ」

俺の言葉にダリアは不思議そうな、それでいて少しだけ嬉しそうな顔をするので、俺は思わず抱きしめそうになるのをどうにか堪えてダリアの頭を撫でた。

「喜べ。お前が初めてだ。そして多分これからお前だけだ」

「なにそれ」

それを聞いてダリアは少しだけ目の下を染めて微笑むと、何を思ったかおもむろに俺の下履きの上からペニスを撫でてくる。

相変わらず何の前触れもないダリアからの攻撃に思わず俺は反応しつつ、ダリアを睨みつけた。

「昨今の姫は王に何の許可もなく触ってくるのか？」

「お姫様だって王様に気持ちよくなつて欲しいって思ってるからね」

そう言つてダリアは俺の下履きを脱がせようとしてくるので、俺はその手を制して自ら下履きを脱いだ。

そこには完全に勃起したペニスが今にも腹につきそうな程反り返っている。

俺はそんなペニスを経く扱きながら言った。

「こんな風にまた勃つようになるとはな。お前には本当に報奨を与えたいぐらいだ」

「そんなのいらぬから、夢叶えて」

「ああ。ただお前が俺の上で死んでいくのを見るのは嫌だな。だからその夢を叶えるのは寿命が近づいたらでいいか」

相変わらずなダリアの言葉に俺は思わず苦笑いを浮かべてダリアの頬を撫でた。

「それは年取ってお婆ちゃんになってもこんな風に抱いてくれるって事？」

「そうだ。お前だけだろ、どう考えても。死ぬ間際まで俺の精力についてこられそうな奴は」

「だといいな」

ダリアはきつと俺が特に何も考えずにこんな事を言っていると思っっているのだろうが、それは違ふ。これはピロートークでもなんでもない。大切な将来の約束の話だ。

「俺が保証する。お前ぐらいだよ。俺がここまで勃つのは」

俺はそう言つてダリアの膣口にペニスを押し当てた。たったそれだけの事なのに、ダリアはこれから先を期待するかのように腰を浮かせた。そんなダリアを見て俺は思わず苦笑いを浮かべてしまふ。

「姫は本当に堪え性がないな」

「だって、気持ち良いの知ってるんだもん」

ダリアはそう言つて俺の首に腕を回すと、唇を塞いでくる。それが合図だったかのように俺はペニスをダリアの中に深く埋め込んだ。

「んんっ！」

「っふ、っう」

この瞬間が一番好きだ。ダリアの中はまるで俺の為にあるかのように俺を受け入れ、さらには締め上げてくる。

挿入した刺激に思わずどちらともなく息を漏らす、それでも互いにキスを止めようとはしない。まるで何日もキスしていなかっただかのように互いの口内を蹂躪し合った。

ようやくペニスが最奥に到達すると、キスを止めて互いの指を絡めた。この瞬間だけは、いつも捉えどころの無いダリアが俺の物になったよう、胸が疼く。

「あっ、あっ、奥、当たってる！」

「当てて、るんだよ」

本当はいつものように激しくダリアの中を堪能したいが、今日はお姫様の気分だと言うので俺は柄にも無くそれに大人しく付き合っていた。

いや、それ以前にこんなボコボコに殴られている女を抱くなよと言う話ではあるのだが、上書きをしてくれと言ってきたダリアは今にも泣き出しそうだった。きつと本気で怖くて仕方なかったに違いないのだ。

それでもそんな事を言ってきたのは、きつと俺の心を汲んだからに違いない。どこまでも献身的な女、ダリアの事だから。

だからだろう。今も本当は激しく動かしたい俺の心に寄り添うように腰を浮かせて自ら角度を変えてきたのは。

そんなダリアに思わず俺は苦笑いを浮かべてしまう。お姫様のように扱えという癖に、誰かに尽くす事は決して辞められないこの女に俺は今も救われている。

一度イッたダリアの子宮はもうすっかり降りてきていた。その後ろ側にペニスが入り込むと、得も言われぬ快樂が襲いかかってくる事もお互いもう知っている。

俺はダリアの腰を掴んでペニスをさらに奥へと押し付けた。それと同時にズルリと狙っていた所に入り込む。

「——っっ」

「あっっ！」

俺達は一瞬動きを止めて身体の奥から響いてくる微かな振動に身を委ねた。

「姫は、寛大だな。こんな、所にまで侵入を許して、くれるのだから」
低く呻きながら俺が言うのと、ダリアも声を震わせて言い返してくる。

「王の、だもん。他の、誰にも許さない、よ」

それを聞いて心の奥が震える。何かがじわりと染み出して、心の深い所が満たされていく感覚に、俺はただ「そうか」としか言えなかった。

ゆっくりとピストンし始めると、その度にダリアは断続的に声を上げた。

「あっ、あっ、あっ！」

子宮の裏側に入り込んだ。ピスが何度も何度も子宮口の裏側から揺らす。

「ひ、あ、あっ、あ、ああっ！」

「いい声だな」

「ん、ふあ……っ」

「もっと、聞かせろ」

「あっ、だめ！ やあっ！」

その声がもっと聞きたくてダリアの耳元でそう囁いた瞬間、何故かダリアはまた軽くいつてしまった。そんなダリアを見て思わず抽送を繰り返しながら小さく笑う。

「どうしてたまにそんな可愛い事するんだ？ そろそろ出すぞ」

「ん……っ」

俺はそう言ってゆっくりとペニスを引き抜き、亀頭だけを膣に残した。そしてまた最奥まで一気に突いてやると、ダリアは一瞬息をつまらせる。

「っ、はぁ……」

「や……あつ！」

その衝撃にダリアの下腹部に力が入る。そんなダリアからの刺激に耐えきれず、俺は予告も無しにダリアの中で呆気なく果ててしまった。

子宮に直接精液を注いでいると、そんな俺の目の前でダリアがうっとりしたような顔をしてポツリと呟く。

「あ、温かい……」

「おま、そんな顔、するなよ——っ」

あまりにも不意打ちのその顔はまるで無垢な少女のようで、俺の中の何かプツンと音を立てた気さえした。

そう思った途端、今しがた吐精を終えたはずのペニスがまた大きくなる。

「王様は元気ですね」

微笑みながらそんな事を言うダリアに顔が赤くなっているのを見られたくなくて、俺は

思わず視線を逸らして呟いた。

「姫の中が良すぎるのが悪い」

そう呟いた途端、何故かダリアの顔が泣き出しそうに歪んだ。そして震える声で俺に向かって両腕を差し伸ばしてくる。

「やだ……オズ、やっぱりいっつもみたいにして」

「なんだ、突然。お姫さまごっこはもうお終いか？」

「私、お姫様じゃないもん……ダリアだよ」

その言葉に俺は一瞬目を瞬かせた。

涙目でこちらを見上げてそんな事を言うダリアの中で、俺は今どんな立ち位置なのだろう。ようやくセフレは卒業したのだろうか？

そう思った途端、何だか胸の苦しさが少しだけ解けた。何かを懇願するようなダリアの心は分からなかったが、ダリアのその一言はやけに俺を安心させた。

「そうだな。お前はダリアだ」

俺にとってはそこら辺の姫よりもずっと大切な存在なのだが、ダリアはまだそれを知らない。

俺はダリアを抱き起こすと、膝の上に座らせて対面座位の状態にして一気に最奥を貫い

た。

「ああっ！」

思わずと言わんばかりに身体を仰け反らせて俺にしがみつくダリアを強く抱きしめる。もう逃さない。どこにもやらない。

そんな願いを込めて何度も下から突き上げると、その度にダリアは何度も何度も達してその度に潮を噴いた。

そんなダリアを見て俺は満足する。これでこそダリアだ、と。

「やっぱり、こっちの方が良いな」

「うん！ あっ、んっ、っふう」

ダリアの腹の中をごりごりとペニスが抉る。一度開いたダリアの最奥は何度も俺の侵入を許し、膣の中はまるで荒波のように激しくうねっている。

「オズ、オズ！ またイツちゃう！」

「俺も、だ。出すぞ」

肉が激しくぶつかり合う音と、卑猥な水音が部屋に響き渡った。そして――。

「あああっ！」

「うっ、っく」

亀頭がダリアの子宮口に当たった瞬間、まるで弾けるかのように遠慮なく俺は精液を吐き出した。

どくどくと溢れる精液をまるで一滴も漏らしたくないとでも言うように、ダリアの子宮口は亀頭に吸い付いて離さない。

やがて吐精が終わると俺はゆっくりとペニスを引き抜こうとしたのだが、膣の中の激しいうねりに耐えられなくて、自分の意思に反してその後も何度か膣の中で潮を噴いてようやく萎えた。

俺達はしばらく抱き合ったまま互いの熱を感じていたけれど、ふと時計を見ると既に夕方方になっている。

それに気づいてようやくやくダリアを離すと、落ちていた上着をダリアにかけて頭を撫でた。

「そろそろ夕食だ。風呂に行くか？」

「うん。続きはまた夜に」

「……まだするのか」

「え？ しないの？」

襲われた直後に出来るものなかなかだと思いが、まさかまだ足りないのか。

呆れ返る俺を見てダリアはキョトンとしていて、その顔がおかしくて俺は肩を竦めてぼ

つりと言った。

「もしかしたら腹上死するのは俺の方かもしれないな」

「駄目だよ！ オズワルドは一分で良いから私よりも長生きしてくれないと！」

「努力しよう。ほら、降りろ。シャワーを浴びて飯だ」

「はい」

気の抜けた返事をするダリアを見て俺は内心ホツとしていた。昼間に起こった出来事の恐怖は、少しは和らいだだろうか。

それから二人でシャワーを浴びて夕食がやってくるのを待っていると、いつもよりも少しだけ遅れて食事が届いた。こんな事は珍しい。

「何かあったのか？」

給仕に尋ねると、給仕は恐縮しているのか肩を震わせて頷く。

「側室係の間で少しトラブルがありました……」

「またか。今度はなんだ」

「こ、ここに王が移ったという事で、とうとう離宮が再開されるのか、と」

「……なるほど。まあ外れちやいないな。ここにダリアが居る事は漏れていないか？」

「は、はい！ それはもちろんです！ ダリア嬢がここにいらっしゃる事を知っているの

は王の側近のみですから。それに箝口令も敷かれていますので、大丈夫です」

「そうか。ならいい。手を止めてすまなかつたな。戻れ」

「はい！」

それだけ言つて給仕はてきぱきと食事を並べて去つていった。

「オズ、大丈夫なの？」

「大丈夫だと言いたいところだが、どうだろうな。女の勘は怖いからな」

あいつらが動くところだ。そんな俺の思考を読んだかのようにダリアは言う。

「そうだよ。女子舐めてたら痛い目見るよ？ 私、やっぱりサロンに戻るのか？」

いつか彼女たちの矛先がダリアに向かうのではないか。俺はそれを一番恐れている。俺を氣遣うようなダリアの言葉に俺は首を振つた。ここでダリアを1人にするのは危険だ。

「いや、サロンに居たのでは今日みたいに何かあつた時にすぐに対処出来ない。ここに居てくれた方が有り難い。やはり側室候補は解散させるか」

「えっ!？」

俺の言葉にダリアは持つていたパンを落とすした。

「なんだ？ あつた方が良いのか？」

「そ、そうじゃないけど、解散なんてそんな簡単に出来るの？」

「出来るさ。言い方は悪いが側室は俺の性欲係だからな。それがお前一人で賄えるのなら、居るだけ無駄だ。違うか？」

「そりやそうだけど……」

俺はもうじき王位を従姉妹に譲るつもりだ。それをダリアはもう知っているはずだが、どうやらにわかには信じられないらしい。

何だかそれが癩で俺はステーキを切り分けて静かに口に運びつつ言った。

「お前が前みたい他に他の女を抱いてこいと言うのならそうするが」

「言わないよ、そんな事！ そうじゃなくて！ そうじゃなくて……」

何が気になるのか、俺の言葉を否定しつつもダリアは視線を伏せる。どうせ俺に勝手に好意を寄せているあいつらの心配でもしているのだろう。

「俺はどのみちあいつらと子どもなど作らない。誰も王妃にするつもりなどない。誰が何と言おうともな。自分で言うのも何だが、俺はもう十分役割を果たしたつもりだ。これ以上を望まれるのはごめんだ」

俺の言葉にダリアはハツとして呟く。

「オズ……そうだよね。ここで生まれて王様の子じゃないかもしれないのに王様になって、挙句の果てに全然違うのに冷酷王だなんて言われて買い食いも出来ず、性欲を持って余して

抱きまくったら泣かれて、挙句の果てに勃たなくなつたんだもんね……王様なんてそりやすぐにでも辞めたいよね」

思わずと言わんばかりに漏れたダリアの本音に俺は思わずパンを落としたり。

「というか、思っけていても普通王に対してそんな事言うか？」

「そうやって改めて言われると自分が相当不憫に思えてくるな。だがお前だって人の事は言えないぞ。記憶を失つた挙げ句に仲間に騙されて王の軍の慰み者になつたと思つたら命を狙われ全財産も盗られ、セックスし放題だと思つて入つたサロンでも命を狙われ全財産を盗られ、最後は結局冷酷王の相手しか出来なくなつたんだからな」

むしろこいつの方が断然酷い目に遭つてゐる気がするが。そんな言葉を飲み込むと、目の前のダリアは唇を尖らせて言う。

「最後のは別に良いじゃん」

「そうだな。それは俺も良かったと思つてる」

命を狙われている者同士、今や俺達の関係は一蓮托生だと言つても過言ではない。俺達はしばらく互いの顔を見つめていたが、ふとどちらともなく笑い出した。

「ほんと、何でこんな事になつてゐるんだらう？」

「分からん。だが、これで良かったと本当に思つてゐるぞ」

「それは私もだよ。結果オズワルドとずっと一緒に居られるし、何より気持ち良いからね！」

「……お前は本当に欲望に忠実な女だな」

「それが私のアイデンティティだからね！」

「ろくでもないアイデンティティだな」

和やかに食事を終えてソファでゆっくりしていると、ふとダリアが尋ねてきた。

「ねえオズワルド、もし私の記憶がある日突然戻ったらどうする？」

その質問に俺は口元に手を当てて考え込む。

「……どうだろうな……分からないな」

記憶が戻ったダリアは、十中八九俺の元を去るだろう。きっと自分がしてきた事にドン引きして俺を恐れ、そこらへんの女たちのように俺から距離を取るのだろう。

けれど、もしも心のどこかで俺の事を覚えてくれていれば、また戻ってくるかもしれない。

「分からないの？」

「ああ。記憶が戻ったらお前は俺の事も思い出すだろう？ その時、お前は絶対に今の態度ではないだろうしな」

これはまず間違いない。ダリアがどこの出身であれ、俺は最早色んな意味で有名になり

すぎた。

「それはそうだよね。そっか……記憶、戻らないと良いな」

俺の答えにダリアが何を思ったのかは分からないけれど、ダリアは俺に身を寄せてぽつりと言った。

「そうだな。俺もそう思うよ」

思わず呟いた言葉にダリアは一瞬ハツとした顔をして俺の胸におでこを擦り付けてくる。

「おい、くすぐりたい」

「気持ち良いの間違いじゃない？」

「……お前な」

思わず呆れる俺にダリアは笑って抱きついてくると、先ほどの約束通り俺達は深夜までまた互いの身体を貪ったのだった。

翌朝、誰かが離宮の外で怒鳴っている声で目が覚めた。

目を開けると、ダリアもまた目を覚ましてしまったのだろう。

怪訝な顔で俺を見つめてくるので、俺はダリアを抱きかかえたままドアを見つめた。

「ん……誰か来た？」

「みたいだ。ちよっと行ってくる。まだ寝てていい」

その言葉にダリアは軽く頷くとモゾモゾと毛布に潜り込んで顔だけ出した。

「ん……オズ、いつてらっしやい……」

「……ああ、行ってくる」

行つてらっしやいなんて誰かに言われる事など今まで無かった俺だ。この台詞は何度聞いてもむず痒くなる。

一瞬の間を置いて俺はベッド脇のソファにかけてあつたガウンを着て寢室を出た。すると、部屋の前には険しい顔をしたセバスチャンが立っている。

「あいつらか？」

「はい。申し訳ございません。昨夜、給仕係がこのサロンにダリア嬢がいらっしやる事を漏らしてしまいました」

「そうか。そいつには暇をやれ。まあ丁度良い。着替えてくる」

そう言つて部屋に戻つて急いで着替えていると、それまで寝ていたダリアがもぞもぞと毛布から這い出てきて後ろから俺の寢癖を手櫛で整えてくる。

「はねてるよ」

「悪いな。……お前もだぞ」

ふと見るとダリアの前髪にも派手な寢癖がついている。

一体どんな寝方をしたらこんな寝癖がつくのか。笑いながらダリアの前髪を直してダリアを抱きしめると、いつものようにダリアのナイトドレスのボタンを留めた。

「厄介事？」

「ああ、特大のな。いいか、今日はここから出るな。俺が戻るまで絶対にだ。食事はここに運ばせる。先に食べてろ」

「分かった」

素直に頷いたダリアの頬とおでこにキスをして寝室を出ると、ダリアの事はセバスチャンに任せて応接室へと向かった。

昨夜はあれほど良かった機嫌も、これからあいつらに会うのかと思うと途端に悪くなる。応接室のドアを開けると、そこには美しいドレスと化粧、アクセサリーで着飾った貴族の女たちがズラリと座っていた。

そんな女たちを見てふと先ほどのダリアを思い出してそのあまりの違いに噴き出しそうになったが、それをどうにか堪えて少女たちの間を抜けると中央の席に腰掛けて足を組む。そして女たちをゆっくりと見渡し冷たい声で言う。

「何の用だ」

その一言に女たちは黙り込んだ。恐怖からか後ずさる者までいる。そんな中、ダリアが

戦場で見たと思われる女が一步前に進み出て俺の前で膝を折った。

「王、早朝に失礼いたします。ですが、昨夜こちらにサロンから移された者がいると聞いて、側室候補の私達も馳せ参じました」

「俺は呼んでいない」

「はい。ですが、ここは元々側室の為の離宮だと聞いております。でしたら、私達側室候補もここに住む権利があると思つたのです」

まるで当然だと言わんばかりに女が言う。それに続いて違う女も前に出てきて膝を折つた。

「王が慰み者を今も愛玩している事は存じておりますが、その娘は側室候補ですらありません。王がこの離宮を再開させたという事は、側室制度が復活したのだと私達は捉えております。違いますか」

聡明そうな声の女は凜とした顔で俺を見上げてくる。きっと実際に聡明なのだろう。王妃には相応しいのかもしれないが、妻となると話は別だ。こんな堅苦しそうな女は死んでもごめんだ。

俺は女を見下ろして静かに口を開いた。

個人的な事で申し訳ないが、朝のあの微睡んだ胸が疼くような時間を邪魔されたのは許

しがたい。

「ここは側室の為の離宮だと言われているが、実際には違ふ。ここは愛人を囲う場所だ。だから俺はサロンからそいつを連れてきた。何より俺は三年前に側室を全て解散した日から、ただの一度も側室制度を再開するなどと言っていない。だが、それではお前たちも納得しないだろう。よって、ここに宣言する。俺の側室はただ一人、そのサロンから連れてきた女だけだ。この宣言を持って今日付けで側室候補は解散とする。三日以内に全ての荷物をまとめて城から出る。これは勅令だ。皆、従うように」

それだけ言つて俺は立ち上がった。俺の言葉に女達は呆気に取られたような顔をしているが、その合間を縫つて部屋から出ようとした俺の腕を、誰かが掴んだ。振り向くと、先程聡明そうだと思つた女が醜く顔を歪めて懇願するような顔でこちらを見上げている。

「お、お慕いしているのです、王！」

「そうか。だが俺はお前など知らない。手を離せ。不敬だぞ」

冷たく言うが、それでも女は手を放そうとはしない。俺は小さく息を吐くと、懐剣を取り出して女の首筋にピタリと当てた。そんな俺の行動に女たちが短い悲鳴を上げて息を呑む。

「お前たちも知つての通り、この城にはスパイが幾人も潜んでいる。お前たちの中にも居

た。そんな者達を俺の側に置くと、本気で思うのか？」

「お、王は私達を疑っておられるのですか!？」

「当然だろう？ 貴族の娘など一番信用出来ない。何故か分かるか？ 俺達がまさにそうだったからだ。謀反を起こし、両親、重鎮を牢に追いやったんだからな。俺達を一番疎ましく思っているのは、お前たちの親だ。そんな奴らに送り込まれた者達をどうして信用出来る？」

その言葉に女たちは黙り込んだ。

とはいえ、ここに居る家柄の者達は全員謀反など考えてもいないだろう。

けれど違う意図がある。娘を使い、王家との関わりを持つことで政に関わろうとしている事は必須だ。それでは俺達が何の為に謀反を起こしたのか分からない。

剣を収めて再度歩き出した俺を、もう誰も留めはしなかった。

しばらくして寝室に戻ると、ダリアは食事を前に何故かセバスチャンと談笑していた。食事にはまだ一口も手がつけられていない。

「なんだ、まだ食べて無かったのか」

俺が問いかけると、ダリアは笑みを浮かべてこくりと頷く。

「うん。一緒に食べよ」

気軽にそんな事を言ってくるダリアを見て、ようやく張り詰めていた糸が解けるのを感じる。

些細な事だと思うのに、こうして待っていてくれた事をこんなにも嬉しく思うのかと自分でも不思議だ。

「別に待ってなくても良かったんだぞ」

「1人で食べるの寂しいじゃん。ほら、いただきますして！」

「俺は子どもか」

そう言っただリアの正面に座ると、そんな俺を見てセバスチャンが目を細める。

「王、私もこちらに移ってもよろしいでしょうか。前回のような事がまた起こるかもしれない」

「ああ、そうだな。どのみち城に居ても俺が居なければ仕事もないよな」

「はい。王は今後はこちらで生活されるおつもりでしょうか？」

「そうだな。しばらくはそのつもりだ。それから側室候補は解散してきた。皆を三日以内に城から退去させてくれ」

その言葉にダリアとセバスチャンは驚いて俺を凝視してくる。

「ほ、本当に解散してきたの!？」

「ああ。何か問題があるか？」

「いや、私は無いけど、他の子はそりやもう不満だらけなんじゃ……」

「そうかもな。だが俺の相手が出来るのはどうせお前だけだ。あいつら1人1人と寝ている時間が勿体ない」

「王、僭越ながらよろしいでしょうか？」

「なんだ？」

「それは流石に時期尚早ではありませんか？」

「そうか？ 良い頃合いだと思いがな。どのみち解散する予定だったんだ。それに抱く気も無い側室を置いておくほどうちの財政は豊かではない」

はつきりと言いつつ俺の言葉にセバスチャンが苦笑いを浮かべた。それを聞いてダリアが途端に不安そうな顔をする。

「この国、貧乏なの？」

その言葉に俺は思わず咽て口元を拭う。

「別に貧しくはない。ただ、城で無駄遣いをしていたのでは国民に面目が立たないだろう？」
「それはそう。オズワルドは儉約家だね」

一体どんな想像をしたのか、そう言ってダリアがパンを千切り始めたので、そんなダリアに俺は白い目を向けた。

「ただお前の全財産が12万マールだと聞いた時は、辺境の地にもっと金を流さなければならぬと思つたがな」

流石にあれが全財産だと聞いてしまうと、色々と不安になってくる。王都はそこそこ潤つているが、地方ではもしかしたらそんなにもカツカツで暮らしているのだろうか、と。

そんな俺の言葉にダリアが苦笑いを浮かべた。

「え、何かごめん」

「ダリア嬢の全財産は12万マールだったのでですか？」

思わずと言わんばかりに謝るダリアにセバスチャンが不思議そうな顔をしてダリアに尋ねた。そんなセバスチャンの問いかけにダリアは恥ずかしがる素振りも見せずに頷く。

「そうでしたか。ですが裏を返せばその金額で毎日を暮らせていたという事。物価が王都とは全然違ふのかもしれないね」

「セバスチャンさん！ あなたただだよ、私の全財産を聞いてもドン引きしなかつたの！ 何に感激しているのか喜ぶダリアを見て俺は呆れていた。あと、セバスチャンに敬称はいらぬ。どう考えても言いにくいだろう。」

「セブにさんはいらないぞ。言いくいだらう？」

「せぶ？」

「ああ。愛称だ」

「それじゃあセブさんにする！ 良いですか？」

「仲間内は皆私の事をそう呼びます。お好きなように呼んでください」

セバスチャンは目を細めて慣れた手つきで紅茶を入れる。その様子を楽しそうにダリアは見つめている。

朝食を食べ終えて職務に戻った俺は、電話を使ってアーノルドに連絡を入れた。

「アル、側室候補を今朝解散した」

『これはこれは。まあそのうちやるだろうとは思ってたけど、随分早かったね』

「ダリアがここに居る事がバレた。漏らしたのは給仕係だ。暇を出して一応見張りの騎士をつけている」

『給仕、給仕……ああ、今年入ったのかな？』

「そうだ。異例の昇給で俺の給仕係になったと周りからも言われていたようだな。恐らく何らかの手を使いその地位を手に入れたんだろうが、城での交友関係を洗っておいてくれ」

『了解。何か疑わしい事でもあったの？』

「昨日、ダリアが襲われた。掃除係から馬車を奪って離宮に侵入した奴らがいる」
俺の言葉にアーノルドは一瞬声を詰まらせる。

『大丈夫なの、彼女』

「ああ。むしろいつもよりも激しかった」

『……あ、そ。それで、側室候補たちはすんなり引き下がったのかな？』

「表向きにはな。だがこんな事ぐらいで諦めたりしないだろう。あいつらは本当に蛇のようにしつこい」

ため息を落として言う俺に電話口からアーノルドの含み笑いが聞こえてくる。

『違うでしょ？ 君はサキュバスちゃんとの時間を邪魔されなくなかったでしょ？』

「……うるさい」

完全に当たっているが、それでからかわれるのは癪だ。何故なら、自分でもどうしてここまでダリアでないと駄目だと思うのか分からないのだから。

電話を切って今度は各地から届く嘆願書に目を通した。その中の一通はダリアが居たという村からのものだ。

「なんだ、やっぱりあいつが特殊だったんだな」

税金を見る限り、そこまで王都との落差は無い。ならばどうしてダリアはあそこまで金

が無かったのだろうか。記憶を失う前のダリアは実は散財癖があったのか？
そこまで考えてふと違う考えが脳裏を過る。

「この村に来て間もなかった……もしくは、この国の通貨が無かったとかか？」
ダリアへの謎は深まるばかりだ。もしもダリアの金が無かった理由が散財癖以外のもの
であれば、ダリアは何らかの理由でこの国にやって来たという事になる。

俺は立ち上がって部屋の中を歩き回りながら顎に手を当てて考え込んだ。

「もしもダリアがスパイとしてこの国にやってきた場合、自ら志願して慰み者に入った可能性が高い。だが、それならば記憶を失う意味などないはずだ。記憶を失うような何かがあったのだと仮定すると、ダリアには仲間が居たが、その仲間と何らかの揉め事が起きてダリアは記憶を失う羽目になった。いや、これも現実的ではない。……あいつは一体、どこの誰なんだ」

しばらく謎の女ダリアについて考察していたが、ふと窓の外の中庭で呼んだ覚えのない若い男が作業しているのが目に入った。

「誰だ」

まさかまたダリアを襲いに来たのかと思いい中庭に出ると、中庭には若い男の他にダリアもセバスチャンも居る。

俺は何故か男たちを前にしてはしゃぐダリアに背後から近づくと、その華奢な腕を引いた。

「ここで何をしている？」

「オズワルド！」

「お、王！」

ダリアは振り向いた。満面の笑みで。それを見て俺は思わずダリアをじっと見下ろし、次いでセバスチャンに視線を向けて言う。

「どういう事だ？」

「私が呼んだのです」

「何故」

「それは——」

「私が頼んだからだよ」

ダリアは俺の怒りも気にならないのか、意気揚々と俺を見上げて笑う。

そんなダリアに少しだけイラつきながらも出来るだけ冷静に尋ねた。

「それこそ何故？」

「談話室にね、あのサロンみたいなカウンターを作ろうと思って！」

「カウンターバー？」

「うん！」

満面の笑みで頷いたダリアを見て、完全に毒気を抜かれてしまう。多分、こいつは本当に純粹に、何故か突然カウンターバーを作りたくなつたのだろう。俺は大きく息を吐いて私の頭に手を置いた。

「——そうか。お前たち、設置はこちらでやる。突然呼びつけて悪かつたな。戻っていいぞ」

「は、はい！」

「そ、それでは失礼いたします！」

俺の言葉に二人は背筋を伸ばしてそそくさとまるで逃げするように離宮を出て行った。そんな二人の背中にダリアが大声で声をかける。

「二人共、ありがとー！」

誰にでも愛想が良いのも考えものだ。そんな事を考えながらダリアを見下ろしていると、ふとダリアが振り返って尋ねてきた。

「オズ、怒ってる？」

怒ってはいないが、ムカつきはした。きっと俺の眉間にくつきりとシワが入っているの

だろう。そんな俺を見てダリアが苦笑いする。

「いや。別に怒ってはいないが、何故突然カウンタバーなんだ」

「だってサロンではいっつもお仕事終わったらバーごっこしたじゃない。それに前にオズワルド言ってたじゃん。この瞬間が一番仕事を終えたって気になってホツとするなって」

その言葉を聞いてようやく俺は表情を緩めた。

いや、むしろセバスチャンが驚いているので、もしかしたら少し笑っているのかもしれない。

「……確かに言ったが、よく覚えてたな。そんな事」

「忘れないよ。それにその後絶対エッチになる——痛い！」

とんでもない理由を話し始めるダリアの頬を摘んで引っ張ると、慌ててダリアを睨みつける。

「セブも居るんだぞ」

「ごめんなさい」

「まあ良い。セブ、運ぶぞ」

「畏まりました」

そんな俺達のやりとりを笑顔というか、ニヤニヤしながら見ていたセバスチャンは、俺

の一言にキビキビと動き出す。

男二人で運べばカウンターなど一瞬で設置できる。どこかで見たようなカウンターバーを見てダリアははしゃぐように椅子を三脚置いて手を叩いた。

「すごい！ ねえねえ、あのサロンみたいじゃない!」

「ああ。物凄い既視感だ。で、今日は何がオススメだ?」

俺は上着を脱いで椅子に座り頬杖をついていつものようにダリアに今日のおすすを尋ねると、ダリアは待つてましたとばかりに立ち上がって笑顔で答える。

「今日はサイドカーだよ！ ほら、セブさんも座って!」

「いえ、私はまだ仕事が」

「固い事言うな。ほら座れ。で、どんなのなんだ?」

初めて聞く酒だ。そう思いつつ興味津々で身を乗り出した俺の隣にセバスチャンが腰掛ける。

ダリアは相変わらず水筒に氷を入れ、次々酒とジュースと氷を入れ、いつものように大きな音を立てて振り出した。

それを見て普段何にも動じないセバスチャンが流石に目を丸くしている。そして出来上がったのは綺麗な黄色いカクテルだ。